

年報

2023 年度



東京医療保健大学東が丘看護学部

TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

Higashigaoka Faculty of Nursing

東京医療保健大学東が丘・立川看護学部（臨床看護学コース）

TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

Higashigaoka-Tachikawa Faculty of Nursing

(Clinical Nursing Program)

2023 年度 年報

目次

○巻頭言	1
1. 組織図	2
2. 学内行事の概要	3
3. 入試状況	5
4. 教職員名簿	9
5. 委員会活動	12
6. 教育活動	
6-1 学部	16
6-2 大学院	
▶高度実践看護コース	36
▶高度実践助産コース	42
▶高度実践公衆衛生看護コース	49
▶看護科学コース	55
▶博士課程	56

令和5年度年報発行を記念して(巻頭言)

東が丘看護学部と東が丘・立川看護学部(臨床看護学コース)の高度な判断力と実践力の修得に係る学生の評価は、極めて満足のいくレベルでした。これも指導教員や実習施設の実習指導者の方がたのご指導のお陰と心から感謝申し上げます。教員も学生もとても最終目標に近づいていますので大変嬉しく思っています。本年度から看護技術のチェックリストはポートフォリオ入力し、その都度データが集計されて実習施設での途中経過が解る様になり、とても便利に活用できています。東が丘看護学部では、感染防止対策には十分留意し、実習施設の状況を勘案し、活動してきた結果・成果です。看護教育は指定規則に縛られています。本学部は4年間の修了要件が少なくぎりぎり124単位としていますので、学生の主体性や計画的な活動を信じてどんどんやって頂くことにしています。

前期セメスター4月と後期セメスター10月の教授会には亀山周二学長先生が30分～40分程度の特別講話を実施します。現時代の変化が激しく文部科学省や厚生労働省においては、人口問題、グローバル化など学校教育法や私立学校法の改正等があり、大学の運営的な事項も変化しています。社会状況の変化に併せた教育・保健医療政策が企画されています。それらのポイントをタイムリーに教員にお話し頂きました。今回は教授会メンバーだけでなく教職員全員出席し聴講致しました。私学として特徴的・教育的な取り組みによりポイント加算され私学助成金が付くということ等の理解も出来てきています。

今年度は文科省の設置審査委員会からの立ち入り調査を受審しました。大学設置審議会のメンバー2人と文科省から2人が見え亀山学長以下田村副理事長、松浦事務局長等同席の下全体的運営について説明を求められました。新学部は完成年次を迎えるまでは教員は退職をしないことになっています。しかし、教員は解っていても自己中心に判断します。学生12人と教員4人、実習施設の指導者等のヒアリング、校舎を全て廻り教育環境の調査などとてもハードな一日でした。しかし、成長した学生たちの考えや回答を確認し、とても褒めて頂き、来校して本当に良かったと最後に所感を述べて帰られました。大変な一日でしたが、その言葉に救われて疲れも吹き飛んだ気持ちでした。矢張本学の学生は素晴らしい教育で成長していると将に実感しました。

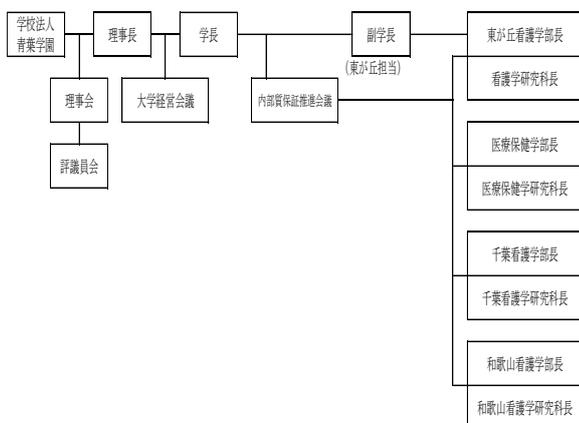
昨年の3月31日で東が丘・立川看護学部臨床看護学コースは廃止されます。やっと東が丘看護学部は独り立ちです。本年報は、私たち自身を初め、昨年度の主として教育業績や取り組みを振り返り、今後の展望を共有するための重要な報告書です。皆様のご支援に深く感謝いたします。特に昨年度は、厳しい経済環境や社会の変化にも全員でもって対応できました事心より感謝申し上げます。東が丘看護学部の年報をご覧いただいた皆様、この年報は、昨年度の教育・研究・社会貢献の成果や取り組みを振り返り、今後の展望を共有するための重要な報告書です。看護教育のプロフェッショナルとしての使命を全うするために、多くの方々のご支援に深く感謝いたします。

研究業績につきましては詳細な報告を年報紙面で行ってはおりません。研究活動についても学内では学部学生、研究科学生、教員の研究実施数は本学で最も多い実施件数として表れています。昨年度は、研究の推進にも力を入れ国内外の学会や研究プロジェクトへの参画を通じて、看護学の発展に貢献しました。また、地域との連携を強化し、地域のニーズに応える看護・教育サービスの提供や地域貢献活動を学生と共に積極的に展開しております。今後も益々本学の発展を期待したいと思っております。

令和6年4月22日

東が丘看護学部長 山西文子

1. 組織図

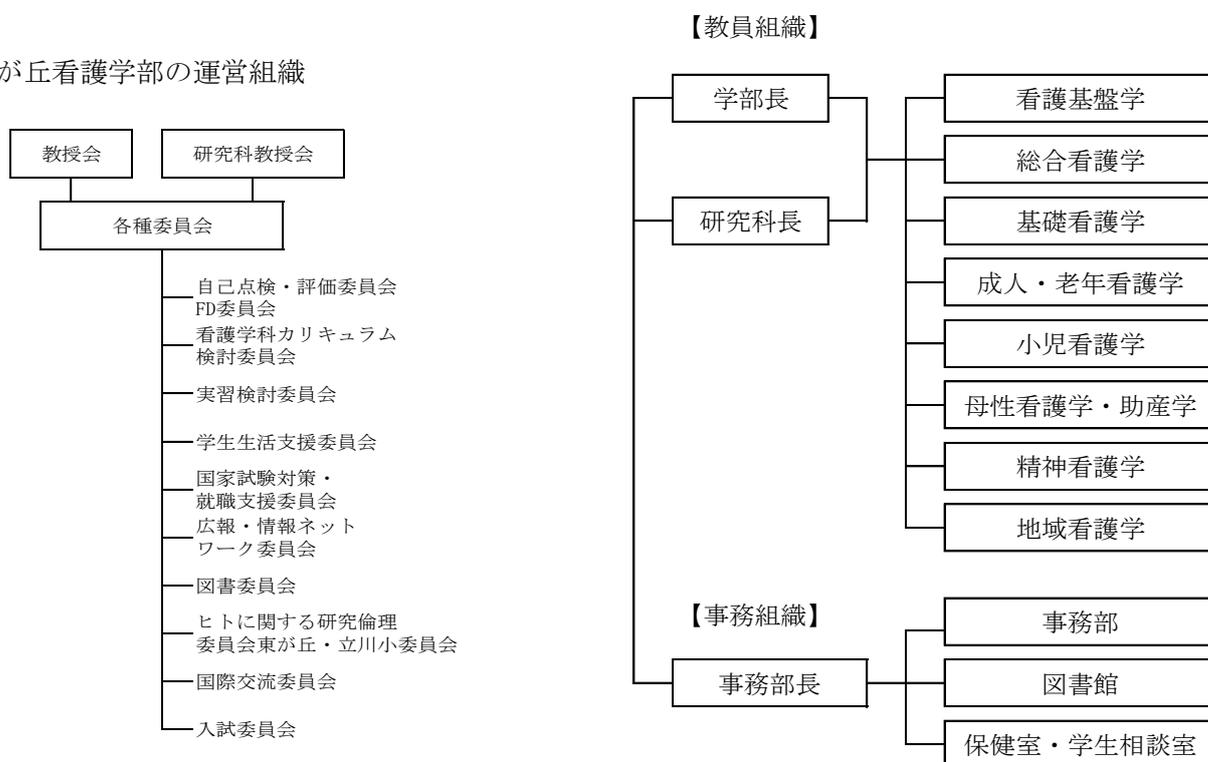


※大学経営会議：年 5 回開催

※理事会・評議員会：年 3 回同時開催

※学部長等会議：年 1 1 回開催

東が丘看護学部の運営組織



2. 学内行事の概要

2-1. 学年暦

【 前 期 】

4月

- 3日 学内オリエンテーション(1~6日)、新入生、ガイダンス
- 4日 入学式、在校生・健康診断
- 7日 前期 Semester 授業開始
- 21日 コンタクトミーティング
- 27日 新入生合宿研修(~4/28)

5月

- 8日 在宅看護学実習(~6/30)
- 29日 看護学過程展開実習(~6/9)

6月

- 9日 スポーツ大会
- 11日 来学型オープンキャンパス
- 26日 看護学体験実習(~6/30)
- 27日 高校教員対象大学説明会

7月

- 4日 スカラシップ給付授与式
- 8日 大学院来学型個別相談会
- 18日 看護学統合実習(~7/28)
- 29日 大学院来学型個別相談会

8月

- 1日 WEB オープンキャンパス(~9/29まで)
- 6日 来学型オープンキャンパス

9月

- 2日 大学院前期入試
- 15日 FD 研修会
- 17日 入試説明会(総合型・学校推薦型)
- 21日 WEB 入試説明会(~11/5)
- 25日 各論実習(R6.2/9まで)

【 後 期 】

10月

- 3日 学校推薦選抜入試説明会
- 15日 総合型選抜
- 28日 大学院来学型個別相談会

11月

- 1日 大学院 WEB O/C (~12/7)
- 3日 学校推薦選抜入試説明会
- 4日 医愛祭(~5日世田谷キャンパス)
- 8日 卒業研究発表会
- 12日 学校推薦型選抜
- 24日 大学院過去問閲覧会(+27~29)
- 25日 公開講座

12月

- 4日 慢性期看護学実習(~12/22)
- 8日 WEB 入試説明会(~R6/2/16)
- 13日 老年生活支援実習(~12/19)
- 16日 大学院後期入試
- 21日 個別見学会

1月

- 9日 コンタクトミーティング
- 23日 一般選抜 A 日程(~24日)

2月

- 3日 国家試験壮行会
- 4日 一般選抜 B 日程
- 18日 一般選抜 C 日程
- 19日 日常生活援助展開実習(~R6/2/26)
- 19日 就職支援講座
- 22日 看護師国家試験

3月

- 18日 学位記授与式・修了式
- 24日 オープンキャンパス

2-2. オープンキャンパス

6月11日(日)、8月6日(日)にオープンキャンパスを実施した。

概要は学部・大学院各コース説明、講義・演習の模擬授業体験、キャンパス見学ツアー、教員・学生との懇談である。8月6日回においては東京医療センターの協力を得て、コロナ禍で中断していた病院見学会を実施した。3月24日(日)には主に令和7年度入学予定の生徒に向けて実施した。

2-3. 東が丘看護学部入試説明会

本年度の入試説明会は、総合型選抜・学校推薦型選抜受験者を主たる対象として、9月17日(日)に実施した。

2-4. 個別見学会・個別相談会

学部個別見学会を11月21日(火)、12月21日(木)に実施した。

また、大学院の個別相談会を7月8日(日)、10月28日(日)、11月24日(金)、27(月)~29(水)に実施した。

2-5. 高校教員対象大学説明会

6月27日(火)に対面実施した。

2-6. FD 講座等の開催 (公開講座を含む)

① 4.20 (木) 新着任教員研修

テーマ: 「委員会活動とFD研修について」

講師: 松山 友子 教授 他

② 5.25 (木) 新着任教員研修

テーマ: 「身分および勤務について等」

講師: 山西 文子 教授 (副学長、東が丘看護学部長)

③ 8.29 (火) 第3回

テーマ: 「COVID-19 パンデミックと学生のメンタルヘルス」

講師: 安宅 勝弘 (東京工業大学 保健管理センター 教授)

④ 9.4 (水) 第4回

テーマ: 「コミュニケーションの視点から授業を考える」

講師: 大島 武 (東京工芸大学 芸術学部 教授)

⑤ 11.25 (土) 目黒区連携 公開講座

テーマ:「『診療看護師 (NP) って誰ですか??』に NP がお答えします」

講師: 関口 奈津子 助教

テーマ:「心をそっと後押しして 良い健康高度王を」

講師: 駒田 真由子 講師

⑥ 3.12 (火) 第5回

テーマ:「教職員のヘルスケアを目指して -栄養管理の観点から-」

講師: 北島 幸枝 (東京医療保健大学医療保健学部 准教授)

2-6. 学友会活動

1)スポーツ大会

学友会の全学行事である、スポーツ大会が6月9日(金)に、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館で4年ぶりに終日開催された。東が丘看護学部36名を含む、立川看護学部、医療保健学部、千葉看護学部からの学生197名が参加した。

2)大学祭 (医愛祭)

3年ぶりとなる大学祭を11月4日(土)・5日(日)に世田谷キャンパスで開催しました。今年のテーマは「和」。来場者は1日目に484名、2日目には296名の計780名であった。

3. 入試状況

3-1. 令和6年度入学者選抜状況(選抜試験は令和5年度に実施)

概要

東が丘看護学部看護学科、大学院看護学研究科の入学者選抜の概略は以下のとおりである。

3-1-1. 東が丘看護学部看護学科

入試種別	志願者数	合格者数	入学者数	定員	定員充足率
総合型	40名(93名)	18名(20名)	18名(20名)	8名(8名)	225%(250%)
推薦	24名(77名)	24名(52名)	24名(52名)	38名(38名)	63%(137%)
一般	449名(468名)	191名(155名)	59名(39名)	54名(54名)	109%(72%)
計	513名(638名)	233名(227名)	101名(111名)	100名(100名)	101%(111%)

※カッコ内の数字は前年実績

○ 総合型選抜

(1) 対象

本学を第一志望(専願)とし、下記の入学資格に該当する者

1. 令和6年3月に高等学校(中等教育学校の後期課程を含む。以下同じ。)を卒業見込みで、3年次1学期または3年次前期までの調査書を提出

で

きる者

(2) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜

○ 推薦入試

1) 学校推薦型選抜(指定校)

(1) 対象

本学を第一志望(専願)とし、下記の入学資格に該当する者

1. 令和6年3月に高等学校(中等教育学校の後期課程を含む。以下同じ。)を卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者
2. 高等学校における全体の評定平均値が3.8以上の者

(2) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜

2) 学校推薦型選抜（公募制）

(1) 対象

本学を第一志望（専願）とし、下記の入学資格に該当する者

1. 令和6年3月に高等学校（中等教育学校の後期課程を含む。以下同じ。）
を卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者
2. 高等学校における全体の評定平均値が3.5以上の者

(2) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜

○ 一般入試

1) 一般入学試験 A・B・C日程

(1) 試験科目

A日程 必須科目 英語（100点）選択科目 数学Ⅰ・数学A、生物基礎・生物、
化学基礎・化学、生物基礎・化学基礎から1科目選択（各100点）

B日程 必須科目 英語（100点）選択科目 国語総合(現代文のみ) 数学Ⅰ・
数学A、生物基礎・生物、化学基礎・化学、生物基礎・化学基礎から
2科目選択（各100点）

C日程 必須科目 英語（100点）選択科目 国語総合(現代文のみ) 数学Ⅰ・
数学A、生物基礎・生物、化学基礎・化学、生物基礎・化学基礎から
2科目選択（各100点）、調査書（14点）

2) 大学入学共通テスト利用入学試験 前期・後期

(1) 試験科目

必須科目 英語【リスニングを含む】（200点）

選択科目 国語【近代以降の文章】、数学Ⅰ・数学A、生物、化学、
生物基礎・化学基礎から2科目利用（3科目以上受験している場合は
高得点の2科目を採用（各100点）

ただし、理科を2科目以上選択している場合は、「生物」「化学」の組合せのみ
採用となります。

3-1-2. 大学院看護学研究科

- ・前期9月2日(土)及び後期12月16日(土)、及び3月11日(月)に実施しました看護学研究科の入学試験結果は、次のとおりです。

	定員	出願者数	合格者数	入学者数	定員充足率
修士課程	40名	101名	52名	42名	105%
博士課程	2名	2名	2名	2名	100%
看護学研究科 合計	42名	103名	54名	44名	105%

※いずれの値も前期及び後期の合算値。

○ 選抜方法

[修士課程]

筆記試験、面接及び出願書類を総合して行います。

[高度実践看護コース]

(1)筆記試験

看護学に関する総合的な基礎知識を問います。(120分)

必修問題 3問

(2)面接試験 1人 15分程度

[高度実践助産コース]

①助産師免許取得コース

(1)筆記試験

看護学の基礎知識と母性看護学の知識を問います。(120分)

必修問題 3問

(2)面接試験 1人 15分程度

②助産師プログラムコース

(1)筆記試験

助産学に関する知識と論理的思考力(小論文)を問います。(120分)

必修問題 3問(うち1問は小論文)

(2)面接試験 1人 15分程度

[高度実践公衆衛生看護コース]

(1)筆記試験

看護学に関する総合的な基礎知識を問います。(120 分)

必修問題 3 問 (うち 1 問は小論文)

(2)面接試験 1 人 15 分程度

[看護科学コース]

(1)筆記試験

保健・医療分野に関する知識と論理的思考力を問います。

また、一部の問題は、英語の能力を問います。(120 分)

[辞書(電子辞書は除く) 1 冊を持ち込むことができます。]

(2)面接試験 1 人 15 分程度

[博士課程]

(1)筆記試験

保健・医療分野に関する知識と英語の能力を問います。(60 分)

[辞書(電子辞書は除く) 1 冊を持ち込むことができます。]

(2)面接試験 1 人 15 分程度

4. 教職員名簿 (2023.4.1 現在)

専任教員	担当領域	氏名	職名	採用等年次
	大学院看護学研究科長	大島 久二	副学長/教授	2.4.1 採用
	東が丘看護学部長	山西 文子	副学長/教授	25.4.1 採用
	看護基盤学	明石 眞言	教授	2.8.1 採用
		小野 孝二	教授	25.4.1 採用
		小宇田 智子	准教授	22.4.1 採用
		岸 達也	助教	4.4.1 採用
	総合看護学	山西 文子	教授	25.4.1 採用
		浦中 桂一	准教授	29.4.1 採用
		忠 雅之	講師	3.4.1 採用
		関口 奈律子	助教	5.4.1 採用
	基礎看護学	松山 友子	教授	22.4.1 採用
		高橋 智子	准教授	25.4.1 採用
		吉良 理絵	講師	5.4.1 採用
		ハーネド 明香	助教	2.4.1 採用
		久保田 貴博	助教	4.4.1 採用
		安藤 紗矢香	助教	5.4.1 採用
	成人・老年看護学	竹内 朋子	教授	25.4.1 採用
		松本 和史	准教授	27.4.1 採用

	新山 真奈美	准教授	4.4.1	採用
	原口 昌宏	講師	29.4.1	採用
	高田 由紀子	講師	4.4.1	採用
	丹後 キヌ子	助教	4.4.1	採用
	佐藤 琴美	助教	2.9.1	採用
小児看護学	中島 美津子	教授	28.4.1	採用
	玄 順烈	准教授	26.4.1	採用
母性看護学・助産学	島田 三恵子	教授	3.11.1	採用
	朝澤 恭子	准教授	26.4.1	採用
	佐藤 いずみ	准教授	5.4.1	採用
	小嶋 奈都子	講師	22.4.1	採用
	鬼澤 宏美	助教	2.4.1	採用
	浅井 百合絵	助教	4.4.1	採用
	勝山 なおみ	助教	5.4.1	採用
精神看護学	田中 留伊	教授	22.4.1	採用
	中村 裕美	講師	22.4.1	採用
	菅原 裕美	助教	31.4.1	採用
地域看護学	明石 眞言	教授	4.4.1	採用
	金子 あけみ	准教授	22.4.1	採用
	駒田 真由子	講師	29.4.1	採用
	赤石 春佳	助教	4.4.1	採用
	森山 潤	助教	5.4.1	採用

事務職員	役職	氏名
	部長	平間 義之
	部長代理	内田 智明
	主任	齋藤 容子
	主任(大学院担当)	鎌田 りみ
	職員	岡田 友理
	職員	小宮 咲紀
	職員	佐藤 光伸
	職員	津野 朋子
	職員	秋田 翼
	図書館司書	町田 玲彦
	図書館司書	加藤 亜樹
	図書館司書	遠藤 一恵

図書館司書
学生相談
保健室

栗原 真理
原田 直美
戸谷 益子

5. 委員会活動

自己点検・評価委員会

構成員

朝澤恭子（委員長）、浦中桂一（副委員長）、中島美津子、新山真奈美、岸達也、関口奈津子、森山潤、平間善之（6月まで、事務部）、眞弓彰久（7月より、事務部）

活動内容

令和5年度自己点検・評価報告書の作成を行った。また、令和4年度の年報として東が丘看護学部における委員会活動、教育活動、業績等に関して取りまとめ、本学ウェブサイトへアップロードを行った。

FD委員会

構成員

新山真奈美（FD委員長）、浦中桂一（副委員長）、中島美津子、朝澤恭子、岸達也、関口奈津子、森山潤、平間善之（6月まで、事務部）、眞弓彰久（7月より、事務部）

活動内容

2023年度は外部講師を招いたFD研修会を3回、新着任教員研修2回、合計5回/年を企画・運営した。また、全学や各委員会で企画された研修（7回）について、FD委員会からも参加推進およびFDマップ利活用の案内、学外で行われた新人教員向けの研修会への参加推進とFDマップの利活用の案内も行った。2023度FDマップ対応表の達成率は、教育63%、研究54%、研究77%と、学内FD委員会企画以外の研修も推進し、FDマップを活用することで、研修の充実性が高まった。

東が丘看護学部カリキュラム検討委員会

構成員

松山友子（委員長）、竹内朋子（副委員長）、山西文子（学部長）、明石眞言、小野孝二、島田三恵子、田中留伊、中島美津子、平間善之（事務部長；8月まで）、眞弓彰久（事務部長；8月～）、齋藤容子（事務員）

活動内容

年間計画に沿って活動した。2年目となった新カリキュラムは、事務部と連携を取り変更科目等も問題なく進行している。留年生には個別に新旧カリキュラム対比表を作成した。授業運営については、運営指針に沿って対面授業が円滑に進めるように調整した。また、成績評価については、昨年度検討した申し合わせ事項にそって評価・検討した。次年度も、新カリキュラムの円滑な運営と教育の質の担保に向けた活動を行う予定である。

実習検討委員会

構成員

竹内 朋子（委員長）、浦中 桂一（副委員長）、玄 順烈、佐藤 いずみ、吉良 理絵、
駒田 真由子、高田 由紀子、中村 裕美、岸 達也、久保田 貴博、岡田 友理（事務部）

活動内容

本委員会は、東が丘看護学部の看護学実習教育の質向上を目指して活動している。本年度は、看護学実習年間計画の立案、臨地実習要項の作成、インシデント報告の集計と分析、実習施設対象の看護学実習説明会の開催、独立行政法人国立病院機構 東京医療センター看護部との看護学実習連携会議の共催等を実施した。また、学修ポートフォリオである看護技術経験表を Web 版に更新し、各学年の到達度を集計した。

学生生活支援委員会

構成員

田中留伊(委員長)、玄順烈(副委員長)、小宇田智子、高橋智子、小嶋奈都子、
駒田真由子、高田由紀子、忠雅之、原口昌宏、鬼澤宏美、菅原裕美、戸谷益子、
眞弓彰久、岡田友里

活動内容

学生の相談(学習や進路に関すること等)や学業継続(休学・退学等)・健康状態の把握に関する事項について対応した。主な活動として、1年次生の合同研修は5月に国立オリンピック記念青少年総合センターで実施された。コンタクトグループミーティングは前期・後期ともに対面で開催した。スポーツ大会は6月に駒沢公園屋内競技場にて実施された。大学祭(医愛祭)は11月に世田谷キャンパスにて実施された。定例となっている東京医療センターと協同イベントは七夕飾りつけのみ実施された。ボランティア活動の一環として、10月8日(日)に開催された「第47回目黒区民まつり」に学生ボランティアを5名および教職員3名を派遣した。

国試・就職対策支援委員会

構成員

松本和史(委員長)、島田三恵子(副委員長)、玄順烈、小宇田智子、高橋智子、
小嶋奈都子、忠雅之、中村裕美、佐藤琴美、ハーネド明香、森山潤、眞弓彰久、
齋藤容子

活動内容

国試対策として、全学年に国試ガイダンス、業者模擬試験(4年生7回、1-3年生1-2回)を実施した。4年生に対し、後期に教員による講習(18回)と業者による講習を開催した他、ゼミ単位で個別の学生への支援を行った。就職支援活動として、就職ガイダンス、外部講師を招いた就職支援講座(面接対策講座、履歴書講座、小論文対策講座等)、

卒業生との懇談会、東京医療センター就職説明会を実施した。

図書委員会

構成員

高橋智子（委員長）、朝澤恭子（副委員長）、駒田真由子、高田由紀子、佐藤琴美、丹後キヌ子、図書館 町田玲彦、加藤亜樹、事務部 眞弓彰久

活動内容

学内外で利用できる電子ジャーナル・書籍等のサービス等を検討・継続した。書籍購入のリクエスト、購入をとりまとめ、学生の学習や教員の教育活動に活かせるよう努めた。目黒区との地域連携において、治療と仕事の両立をテーマに選書、コラボ展示、ブックリストの配布を行った。また、目黒区との図書館地域連携に関する合意書を締結した。東が丘図書館の利用実績および各種データベースへのアクセス状況を取りまとめた。

広報・情報ネットワーク委員会

構成員

小野孝二（委員長）、松本和史（副委員長）、佐藤いずみ、赤石春佳、関口奈津子、久保田貴博、浅井百合絵、鎌田りみ(事務)

活動内容

- 1) 大学学部案内 令和5年度の本学の首都圏版パンフレットの作成に携わった。
- 2) 広報イベント
 - (1) 春のオープンキャンパス（来学開催）
 - (2) 夏のオープンキャンパス（来学開催）
 - (3) Web オープンキャンパス
 - (4) 入試説明会（来学開催）
 - (5) 高校教員対象大学説明会（来学開催）
 - (6) 一般選抜科目対策講座（Web 開催）
 - (7) 学科見学会（来学開催）
- 3) その他
 - (1) 学報「こころ」を2回発行し、教育活動や学生支援のPR活動を行った。
 - (2) 出張講義

日本大学櫻丘高校、東京都立松原高等学校、東京都立正則高等学校

ヒトに関する研究倫理委員会東が丘・立川小委員会

構成員

大島久二（委員長）、小宇田智子（副委員長）、小野孝二、久保恭子、竹内朋子、西山健治郎（外部委員）、長谷川一恵（外部委員）

活動内容

東が丘と立川キャンパスにおける卒業研究、課題研究、特別研究、教員研究のうち、ヒトを対象とする研究課題につき、計 71 題の審査を行った。また、書類内容の統一と精緻化を行い周知した。

入試委員会

構成員

非公開

活動内容

東が丘看護学部、大学院看護学研究科の入学試験に係る事項について協議・審議し、試験の円滑な実施を図った。年度当初の予定に加えて、令和 6 年度 4 月に受け入れる博士課程の入学試験を令和 6 年度 3 月に行った。

国際交流委員会

構成員

朝澤恭子（委員長）、金子あけみ（副委員長）、原口昌宏、勝山なおみ、久保田貴博、菅原裕美、丹後キヌ子

活動内容

9 月にオーストラリア：グリフィス大学オンライン研修、3 月にオーストラリア：グリフィス大学現地研修が開催された。研修内容の検討、日程調整、参加 PR、申請手続き、事前研修支援、アンケートの作成と評価等を実施した。国際交流リレー講演：海外の医療に関するオンライン講演会が 3 回開催され、企画・運営を担当した。

看護学研究科カリキュラム委員会・学生支援委員会

構成員

大島久二（委員長）、山西文子（副委員長）、田中瑠伊、明石真言、島田美恵子、竹内朋子、浦中桂一、平間事務部長（6 月迄）、眞弓彰久（7 月より）、鎌田事務員

活動内容

看護学研究科修士課程と博士課程に関する教育計画、実施、評価等に係る質向上のための検討を行った。各コースのカリキュラムや教育・研究に関する取り組みとその評価、単位取得状況等を確認し、研究科教授会への報告及び学籍異動に係る審議等の案件の決定を行った。

高度実践看護コース・高度実践助産コース・高度実践公衆衛生看護コースでは各々 26 名、6 名、3 名、博士課程で 1 名が修了認定された。

6. 教育活動報告

6-1. 東が丘看護学部

【看護基盤学領域】

1. 教育方針

広い視野に立った物の見方を学ぶために人間の生命を自然科学的、倫理的、あるいは社会学的等、多面的な側面より論じることのできる能力を有する看護師の育成を目指す。

2. 科目名

1) 自然科学の基礎 1年次前期

(1) 担当教員 小宇田智子、小野孝二、岸達也

(2) 教育内容

専門基礎分野、専門分野における高度な専門科目を履修するために必須である生物、化学、物理、数学等に関する基礎的な知識を学習することを目的とした。学生によって各内容の理解度に大きな差があるため、基礎的な内容について、理解しやすいようにイラスト等を利用して資料を作成した。学生の個別の質問にはメールで応じて、全学生が最低限の必要知識を得られるように対応した。次年度も学生間で知識の差があると予想される。そのため、学生には予習および復習を促し、授業で使用するスライドはよりわかりやすいものとなるよう工夫し、高度な専門科目に対応できるような知識の習得を目指す。

2) 解剖生理学Ⅰ 一年次前期

(1) 担当教員 小宇田智子、非常勤講師

(2) 教育内容

看護は人を対象にする専門職であり、対象となる人を見て身体の中で起きていることを知り、これから起こることを予測して判断する能力も求められる。その際、身体の異常に気がつく力、異常を知る力が必要になる。正常な身体の仕組みと働きが損なわれると異常となることから、身体の異常とは何かを知り、異常に気がつくには正常な身体の仕組みと働きを知っている必要がある。本科目では、人体や人体を構成する器官・臓器について、正常な構造と働きに関する基本的な事項について、資料を用いて視覚的に示すことでイメージしやすいように工夫し、わかりやすく概説した。次年度も、学生には予習および復習を促し、授業で使用するスライドはよりわかりやすいものとなるよう工夫し、高度な専門科目に対応できるような知識の習得を目指す。

3) 解剖生理学Ⅱ 1年次前期

(1) 小野孝二、大島久二、非常勤講師

(2) 教育内容

人体の構造とその機能を学科目であり、医療職として最も基礎となる科目であり細胞レベルからの成り立ちと基本構造、様々な機構や形態の理解を通じて健康科学を学ぶ上で必要となる基礎知識を習得する。解剖生理学Ⅱでは、消化器、循環器、呼吸器、血液、腎臓（泌尿器）、内分泌、免疫の7領域の緒機能を理解することを目的とした。次年度は、解剖生理学は臨床においてとても重要であることを認識させ学習する工夫をする。

4) 臨床検査学演習 2年次前期

(1) 担当教員 小野孝二、小宇田智子、岸達也

(2) 教育内容

診断・治療の基礎として活用されている臨床検査の原理を理解し、その意義を学ぶことを目的として演習を実施した。組織学検査、心電図検査、血液検査、尿検査、染色体検査、放射線検査の各項目につき、試料の観察や測定等を通して、その基本原理、解剖生理と病態に関する理解を深めた。次年度も引き続き、各臨床検査演習を通じて臨床に近い形での教育を目指す。

5) 臨床薬理学演習 2年次後期

(1) 担当教員 小宇田智子

(2) 教育内容

1年次生で得た薬理学の知識をもとに、治療対象となる患者の状況（年齢、性別、生理的状态など）による薬物動態の知識、作用と薬効について理解させることを目標とした。主に、臨床現場で使用されている薬物の使用目的、作用機序、有害作用・禁忌などに関して看護師が知っておくべき事柄を、随時、解剖生理学や疾病の成立ちの知識を確認しながら概説した。次年度は、臨床的な投与時の看護のポイントなどについても取扱い、より臨床に近い形での教育を目指す。

6) 公衆衛生学 2年次後期

(1) 担当教員 小宇田智子、金子あけみ、非常勤講師

(2) 教育内容

公衆衛生学は集団の健康を対象とするものであり、歴史を振り返れば、感染症との戦いが現代公衆衛生学の基礎を築いたといっても過言ではなく、公衆衛生学の必要性は明らかである。本科目では、広い視野を持ち、社会の動きのなかに、公衆衛生学の要素を見出すことができるよう、可能な限り社会の動きと結びつけた講義を行った。次年度は、学生が現実の社会で起きていることを、公衆衛生学の視点で見ることができるような講義を目指す。

7) 看護研究の基礎 3年次前期

(1) 担当教員 小野孝二、竹内朋子、朝澤恭子、小宇田智子

(2) 教育内容

エビデンスに基づく看護に資する看護研究を実施する素地を形成することを目的とした。看護学における研究の意義、研究を開始するための基礎となる情報の集め方から始め、研究手法の分類と進め方、倫理的配慮、研究のまとめ方の一連のプロセスについて講義した。次年度も、より先駆的な看護研究を題材として取り上げ、研究を実施する素地を形成することを目指す。

8) 英語論文のクリティーク 3年次後期

(1) 担当教員 明石眞言 各領域担当教員

(2) 教育内容

英語原著論文の検索法を示し、各領域に関連し、学生が興味のある英語原著論文をした。論文の内容は、各領域における卒業研究に関連のあるものとした。指定された英語論文を精読し、卒業研究グループの中で発表と討論を行った。次年度は、AIによる自動翻訳機ではなく、辞書を引きながら論文を読む習慣が求められる各自の研究内容と関わりを明確化し、論文から得られた内容を研究に結び付ける工夫をしたい。

【総合看護学領域】

1. 教育方針

アクティブラーニングの導入科目を積極的に増やし、本学のアクションプランの目標100%達成に向かって領域担当の科目は努力する。学生には自ら考える、考えさせる対応を工夫し、時々共有する。また、出来るだけ現実に近い形で知識の統合、判断の根拠、思考のプロセスを繰り返し、技術の実施、評価というPDCAサイクルを廻せるように支援する。また、チームの一員としてのセルフマネジメントの重要性も再確認する機会であり、臨地実習最後の纏めである。臨床への第一歩がスムーズに踏み出せるように4年間の纏めでもあり、社会への橋渡しの位置づけである。学生には、実習病院の一つの病棟の全ての媒体を用い、必要な情報を主体的に収集し、計画し、実践し、評価していくプロセスを体験し、その重要性・大切さを認識させたい。

2. 科目名

1) 看護政策論 (選択科目) 4年次前期

(1) 担当教員 山西文子

(2) 教育内容

今年度は看護行政等に関心の高い学生が選択し約87名であり積極的であった。職能団体の会長からの具体的看護政策企画立案、提言、予算化実施、評価。一人の国会議員による基礎的な知識と実際の政策決定過程に携わった実践、議員立法のプロセスに係る講義を拝聴した。更に後半は現在の社会問題となっている看護問題についてデバート形式で意見を

出し合い積極的な参加であった。

2) 看護情報学・統計学演習 2年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、岸達也

(2) 教育内容

統計学の基本的な性質や考え方を理解し、データ分析の統計手法を学ぶことを主な目標とした。質的データや量的データをどのように取り扱うのか、科目開始時に履修生対象のアンケートを行い、演習データを作成した。身近な事象に関するデータにて興味を引き、アクティブラーニング手法を用いて統計ソフトや表計算ソフトの実践演習を行った。今後は統計ソフトの事前準備を促し、事後学修の徹底を図っていく必要がある。

3) フィジカルアセスメント 2年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、忠雅之、岸達也、関口奈津子

(2) 教育内容

解剖生理およびフィジカルイグザミネーション技術について講義したのち、身体的な機能評価のためフィジカルイグザミネーションについて、学生同士でグループ学習を展開した。アクティブラーニングを対面授業にて展開したが、アセスメントや臨床推論の要素をより多く取り入れて症状マネジメントを思考する機会や時間を授業内で設ける必要がある。

4) 災害看護学 2年次前期

(1) 担当教員 金子あけみ、非常勤講師

(2) 教育内容

災害時の医療・看護活動の基盤となる法的根拠や災害対策及び災害各期の救護活動や看護ケアについて説明し、災害のイメージを得るため、DVD等も活用した。また、世界情勢から自然災害だけでなく、CBRN災害を想定した除染、避難についても説明を加えた。本年度も東京医療センターの災害訓練に参画し、トリアージや傷病者やその家族の思いを疑似体験するアクティブラーニングを実施した。次年度も継続的に実施していく。

5) 政策医療論 2年次後期

(1) 担当教員 金子あけみ、非常勤講師

(2) 教育内容

我が国の医療政策並びに国立病院機構が行う政策医療と今後の医療提供体制、地域包括ケアシステムについて解説した。また、看護の専門職化の歴史、看護の質の向上に向けた取り組みについて説明するとともに、医療従事者法としての保健師助産師看護師法の課題や関連団体の政策・事業についても説明した。本年度は、政策について関心を高めることをねらいとして看護政策の提案提言を実施した。次年度も能動的学習を促進する。

6) 看護職とキャリア形成 4年次後期

(1)担当教員 金子あけみ

(2)教育内容

看護専門職として成長するプロセスとキャリア形成に関する知識を深めることを目的としている。重要なキーワードとして、生涯発達、キャリア発達、リフレクション、プロフェッショナルリズム等を取りあげ、概念的理解を深められるよう事例等を紹介しながら説明した。本年度は、「私のキャリア・プラン」というテーマでグループ討議及び発表会を実施した。次年度も講義内容と教材を精選し、アクティブラーニングの実施に取り組む。

7) 看護管理学 3年次前期

(1)担当教員 中島美津子

(2)教育内容

効果的な看護実践を行うために看護管理プロセス及び看護サービスの特性と質保証を学び、チーム医療のキーパーソンとしての看護職の役割とリーダーシップの基本を理解することを学習目標とし、機能別に医療機関の現職院長や看護管理者をゲストスピーカーに迎え、現場の最新情報を学びディスカッションを毎授業で実施したことで、学生たちも実際の医療現場をイメージすることができていた。

8) 医療安全学 3年次前期

(1)担当教員 中島美津子

(2)教育内容

医療安全の基本的な考え方や安全性の確保に向けた看護職の役割を理解し、実際に起きた事象を多角的な視点で考察し、安全を阻害する要因やその対処・予防方法の理解を深め基本的な対応方法を学習することを目標とした。現職院長や医療安全管理者をゲストスピーカーに迎え、現場の最新情報を学びディスカッションを毎授業で実施したことで、実習に向けて、学生たちも実際の医療現場の安全について具体的にイメージすることができていた。

9) NP 論 (選択科目) 4年次後期

(1) 担当教員 浦中桂一、山西文子

(2) 教育内容

4年次生が選択し、授業にも積極的に参加した。前半はわが国におけるNP教育の実態及び世界各国におけるNP教育・役割・活動の実際についての概要を講義し、その後は我が国において大学院NPコースを修了し現場で活躍しているNPの講師に活動の実際を講義頂き、質疑応答の時間を設けた。今後は講師を適宜変えてプライマリ領域も含め多種多様なNP活動の実際について触れてもらい、学生のキャリア開発に対する動機づけの機会とする。

10) 看護学統合実習 4年次前期

(1) 担当教員 山西文子、浦中桂一、忠雅之、関口奈津子

(2) 教育内容

本実習は、4年次までの全ての看護学実習の内容や看護マネジメントの学習を統合した実習として位置付けている。実習は学内実習と臨地実習からなり、学内実習では4月～7月にレポート作成・プレゼンテーション、看護技術演習を計画実施し、臨地実習は6施設で7月～8月に実施した。来年度は9日間の臨地実習期間となる。実習施設が1施設増えるため、学生の実習目標達成に向け、実習前の学生の準備状況(知識面、技術面、態度面)及び臨床側との十分な教員側、受け入れ病棟等の調整が重要である。

11) 卒業研究 4年次通年

(1) 担当教員 山西文子、浦中桂一

(2) 教育内容

10名程度のグループごとに、研究テーマを設定し、研究計画の立案から成果発表までの一連のプロセスを学修する。2023年11月日に体育館において「卒業研究発表会」を開催し、3年生も含め全教員参加の下、学会形式で発表が行われた。学生同士の質疑応答も活発に行われていた。発表内容を一部サテライトで中継したが回線の不具合で共有できなかった。今後はPC環境を改善して円滑な会の運営を行う。各グループのテーマと構成メンバーは以下の通り。

看護基盤学領域

乳がん患者の心理・社会面に対するアピアランスケアの文献レビュー

金巻 風夏、木内 弘実、木村 結愛、草山 葉月、公荘 沙弥香、佐久間 千秋、
渡辺 奈月

高脂肪食摂取マウスの24時間絶食による炎症性サイトカイン類の発現への影響

岡部 雅、海藤 愛実、黒木 紀華、佐藤 葉奈、高星 友姫乃、山形 日佳、
山田 乃愛、山道 梨沙

総合看護学領域

清潔援助時のベッドの高さの違いが腰部に与える負担

小澤 亜扇、加藤 凧、菊谷 柚夏、児島 帆香、中嶋 鈴香、根本 琴乃、波呂憲伸、
益 美月、山田 恵綺、堀 温博

基礎看護学領域

看護基礎教育におけるアンプルカットの手技に関するテキストの記載内容および提示方法

磯辺 彩乃、大岩 莉子、菊池 昌美、黒瀬 優奈、小橋 愛、定野 美希、佐藤 結香

アンプルカットにおける示指固定がアンプルの切断面・切創の有無・上肢動作に及ぼす影響

先崎 百花、伊藤 夕純、窪澤 花怜、長沼 花音、野澤 沙耶香、埜村 美咲、
松島 あみ、渡邊 はなの

成人・老年看護学領域

救急看護師が感じやすいジレンマとその関連要因

宮崎 光莉、石黒 彩夏、荻原 かれん、川島 梓、五島 瑠音、清水 奈美、
福井 佑佳、矢野 未佳

院外心停止を想定した体表面下の環境の違いによる胸骨圧迫の質に関する研究

石崎 利奈、梅本 万結、岡崎 里桜、桑原 なつみ、小島 七葉、坂元 梨瑚、
佐々木 ひかり、守屋 和輝

小児看護学領域

保育所に通う5歳児の手洗いにおける洗い残しの実態調査

相澤 萌乃、中野 一花

母性看護学領域

看護系女子大学生における月経随伴症状に対する負担感と対処方略の関係

秋山 佳音、飯塚 絢音、石田 桃香、上野 友萌、倉掛 楓、三賀森 香穂、
高柳 令奈

壮年期男女における更年期症状とストレスの関連要因

安達 愛梨、遠藤 咲月、菅野 あゆか、仲野 柚子、橋本 茉奈実、福田 優香、
渡辺 美宙、小松 来美

精神看護学領域

我が国における神経性やせ症の回復に関する概念分析

荒川 みな、市口 穂乃花、岩崎 美樹、小沼 愛依、中里 美羽、中原 蒼唯、羽田 茜、
宮崎 成美、遠藤 青

地域看護学領域

看護学生の臨地実習不安と月経随伴症状負担感の関係探索

高木 晴花、田澤 千莉、戸田 桃菜、中西 杏梨、星野 ひなた、堀内 彩加、
山口 弓乃、山本 麗華

マスクの原則着用緩和後の看護学生におけるマスク着用動機とマスク着用行動に関連する要因

河野 春香、田島 藍子、富岡 莉彩、中村 泉結、森木 絵理、吉田 愛里、
和田 陽花

【基礎看護学領域】

1. 教育方針

看護学の学習の基礎として「何故そうするのか」「何が最善か」を自問自答する力の育成をめざす。また、学生が看護の奥深さや楽しさに触れると同時に、専門的な学習への動機づけとなるような授業展開を探求する。

2. 科目名

1) 看護学概論 1年次前期

(1) 担当教員 松山友子、ハーネド明香

(2) 教育内容

看護および看護に含まれる基本概念（人間・環境・健康）について理解するとともに、学生自身が今後の看護学の学習に向けた自己の課題を明確にすることを目的に授業を展開した。毎回、事前課題を発表する場を設けた他、看護の記録映像を題材に、看護の活動や役割をグループで検討・発表した。学生からは他者の意見から学びが広がったとの意見が聞かれた。次年度も意見交換の場を設け、自らの意見を述べることを課題としたい。

2) 看護実践技術論Ⅰ（日常生活における援助技術と判断） 1年次前期

(1) 担当教員 高橋智子、松山友子、吉良理絵、ハーネド明香、久保田貴博

(2) 教育内容

看護技術の基本的な成り立ち及び人間の生活の特徴に関する理解に基づき、看護場面に共通する技術（感染予防、ボディメカニクス）や人間の生活過程を整えるために必要な看護技術（療養環境・活動・休息・安全・安楽・衣生活・排泄・食事を整える技術）について、体験学習を踏まえた講義やグループワーク、演習を実施した。次年度は演習内容・方法を精選し、LMS教材を有効活用した教育方法を継続したい。

3) 看護実践技術論Ⅱ（治療、処置における援助技術と判断） 1年次後期

(1) 担当教員 吉良理絵、松山友子、高橋智子、久保田貴博

(2) 教育内容

無菌操作、膀胱留置カテーテル、注射、採血などの侵襲を伴う看護技術を、診療の補助技術の提供過程を基に専門職としての知識・技術・態度を身につけられるように教授した。演習では看護師・患者体験を通し、安全に看護技術を実施するための解剖学的な根拠や看護技術を支える看護師の倫理性・安全性を、学生が自ら気づけるように工夫し教授した。次年度は、演習内容・方法を評価・精選し、ICTの活用を含めた教育方法を検討したい。

4) 看護実践技術論Ⅲ（看護技術の統合） 1年次後期

(1) 担当教員 高橋智子、吉良理絵、久保田貴博、吉末雅哉

(2) 教育内容

清潔の援助技術を例に教育用カルテを活用し、グループ・個人で対象の個別性に合わせ

た援助計画の立案および実施・評価を行った。援助計画の実施・評価はグループ討議、LMS教材のルーブリック評価を用いることにより、学生の主体性を向上させることに努めた。次年度も、LMSを活用した指導方法を工夫し、学生が対象の個別性に合った援助を検討・実施できるようにしたい。

5) ヘルスアセスメント 1年次前期

(1) 担当教員 高橋智子、松山友子、吉良理絵、ハーネド明香、久保田貴博

(2) 教育内容

人間の健康問題を包括的に理解するために必要な技術（観察、コミュニケーション、バイタルサイン）について講義・演習を実施した。講義では、小テストを実施し事前学習の成果を確認し、脈拍・血圧測定は技術試験を実施した。また、対象を系統的に理解するため基本的ニード理論に基づくアセスメントガイドを学生が作成し、意見交換の場を設けた。次年度は、バイタルサインの観察およびSBARを活用した報告を強化したい。

6) 看護過程と看護方法論 1年次後期

(1) 担当教員 松山友子、高橋智子、吉良理絵、久保田貴博、吉末雅哉

(2) 教育内容

看護過程の5段階をさらに11のステップに分け、ステップごとに事前課題（ワークシート・事例検討）→授業（グループでの意見交換・事例の参考例の提示と疑問点への解説）→事後課題（事例検討の修正：グループまたは個人）という流れで授業を展開した。反転授業を取り入れた方法により、学生は授業での理解が深められたと述べていた。次年度は、グループ学習の方法を再検討し、グループでの学びを強化したい。

7) 看護理論 2年次後期

(1) 担当教員 吉良理絵、高橋智子、久保田貴博

(2) 教育内容

看護学の基盤となる代表的な看護理論家を選定し理論家の背景・理論の概要・特徴について、担当する理論家をグループ討議し発表会を実施した。学生は、発表後の講義や授業での事前・事後課題に取り組むことで看護理論に対する理解や関心を深め、看護理論を実践に活用する意義について自らの考えを述べることができた。来年度は、グループ討議や発表方法を工夫し、事前・事後課題を充実させ看護理論の活用に向けた理解を深めたい。

8) 看護教育学 4年次後期

(1) 担当教員 松山友子

(2) 教育内容

大学における看護学教育に関わる制度やカリキュラムに関する学習を進めた。本学のカ

リキュラムと授業設計を確認すると共に、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を参考に自らの4年間の学びを評価した。学生は大学で看護学を学ぶ意義を見直し、今後の課題を述べていた。また、授業テーマに沿ったレポートの記載が学びの整理になったと述べており、次年度も文字数や提出期限を検討の上継続したい。

9) 看護学体験実習 1年次前期

(1) 担当教員 高橋智子、松山友子、吉良理絵、鬼澤宏美、岸達也、久保田貴博、佐藤琴美、丹後キヌ子、ハーネド明香、久保田彩、永井史織、森山潤、但井良美

(2) 教育内容

地域包括支援センターを含めた3施設の実習協力を得て、医療施設の環境および看護活動の実際について見学や指導者からの説明を受け、体験的に学習した。学生は、最終日の成果発表を通して、看護・人間・健康・環境に関する学内の学びを具体化させることや看護師の役割への理解を深めることができていた。次年度も実習施設と連携し、学生が健康問題を持ちながら生活する人々やその看護に関心を向けられるよう実習を検討したい。

10) 日常生活援助展開実習 1年次後期

(1) 担当教員 高橋智子、松山友子、吉良理絵、浅井百合絵、鬼澤宏美、勝山なおみ、岸達也、久保田貴博、関口奈津子、丹後キヌ子、森山潤、佐藤琴美、吉末雅哉、久保田彩、長菜摘、永井史織、高松利采

(2) 教育内容

2施設に実習協力を得て、学生は患者1名を受持ち、患者の個別性に応じた援助の実践を目指してバイタルサインの観察や療養環境の整備、清潔ケア等の計画を立案・実施・評価を行った。学生は日々患者とかわるることにより、学内で学んだ内容を具体化させ、個別性に応じた援助の必要性について理解を深めることができていた。次年度も実習施設と連携を図り、学生が個別性に応じた援助を実践できるような指導体制を検討したい。

11) 看護過程展開実習 2年次前期

(1) 担当教員 松山友子、高橋智子、吉良理絵、鬼澤宏美、大野悠子、岸達也、久保田彩、久保田貴博、丹後キヌ子、高松利采、永井史織、中谷順子、ハーネド明香、星野彩、佐藤琴美

(2) 教育内容

2施設の協力を得て、看護過程を展開することを通し、個別性に応じた看護を実践する方法やその意義の理解を深めた。学生は、受け持ち患者の情報をアセスメントし、既習学習で対応可能な看護上の問題点1つに焦点を当てて看護計画の立案・実施・評価を行い、テーマカンファレンスや日々の指導を通して思考を整理・深化させることができ

たと評価していた。次年度も実習施設との連携や指導内容・方法の見直し・充実を図りたい。

【成人・老年看護学領域】

1. 教育方針

成人期と老年期を一連のライフサイクルとして捉え、幅広いライフステージの人々を対象とした看護実践能力の養成を目指している。アクティブラーニングを重視し、“tomorrow’s Nurse”の資質の錬成につながる講義・演習・実習を展開していきたい。

2. 科目名

1) 成人看護学概論 1年次後期

(1) 担当教員 竹内朋子

(2) 教育内容

成人期にある人々の身体・心理・社会的特徴と、成人看護学の基礎を理解することを目標とした。成人期の健康に関する疫学データ、生活習慣と健康問題の関連、成人看護に関する主要な諸理論、成人期の経過別看護の特徴について講義し、自己と他者の経験や意見を学習資源にできるよう、事前課題やグループディスカッションを活用した。成人看護学の導入となる科目であるため、次年度も成人看護の基礎を修得できる講義を目指したい。

2) 老年看護学概論 1年次後期

(1) 担当教員 新山真奈美、丹後キヌ子

(2) 教育内容

老年期にある人々の発達課題および身体・精神・社会的特徴等、高齢者を多角的に理解することを目標に進めた。高齢社会が直面する保健医療福祉の課題や老年看護の役割を理解できるように、事前学習として小テスト、課題（高齢者の特徴・制度・倫理的課題）の提示やディスカッション、最新データの提示、高齢者疑似体験の演習を取り入れた。次年度も学生が高齢者に関心をもち、老年看護学を学ぶことの動機付けとなるように教授する。

3) 慢性期看護論 2年次前期

(1) 担当教員 松本和史、原口昌宏、丹後キヌ子、佐藤琴美

(2) 教育内容

慢性疾患をもつ対象者の受容過程をふまえ、セルフケア能力を高めるための援助について理解することを目標とした。器官系統別に代表的な慢性疾患とその看護について講義した。授業内容に関するテストを毎回実施し理解が深まるよう促した。視聴覚動画と教育用電

子カルテを用いた看護過程演習や血糖測定等の看護技術演習も行い、実践的な理解を深めた。次年度も、看護過程や看護技術の演習を取り入れた授業を行う。

4) 老年看護実践論 2年次前期

(1) 担当教員 新山真奈美、丹後キヌ子

(2) 教育内容

老年期にある対象の健康障害・症状経過の特徴の理解やその看護、看護過程展開能力の習得を目標に進めた。事前学習として各回に小テストや課題を提示し、学修する意義を理解できるように動機づけを図った。演習では、高齢者の生活機能やストレスを活用した看護過程展開演習、高齢者に行われるケア（排泄、移乗・移動、食事等）を中心に技術の演習を行った。次年度も学生が主体的に学び、看護実践能力の基盤となる授業展開を行う。

5) 家族看護学 2年次後期

(1) 担当教員 松本和史

(2) 教育内容

病気や障害が家族に与える影響と家族が障害や患者に与える影響について理解し、家族を単位として展開する看護について学ぶことを目標とした。家族看護に関する講義やグループワークを行い、家族の複雑な問題を多角的に考える力を養った。家族看護の実践者による講義も取り入れた。各回の目標と自己評価に ICE モデルに基づくルーブリック評価を導入した。次年度も、講義とグループ演習を取り入れた授業構成とする予定である。

6) 急性期看護論 3年次前期

(1) 担当教員 高田由紀子、原口昌宏

(2) 教育内容

急性期にある対象の身体的・心理的・社会的特徴と生命維持、術後合併症予防、回復に向けた看護について理解することを目標とした。代表的な疾患の病態と手術を中心とした治療、救急集中治療の特徴について講義を行い、侵襲による変化、特有の合併症や看護についての理解を深めた。次年度はより周術期看護の実践に直結するアセスメント能力向上と患者の全人的な理解を深める授業を目指す。

7) 終末期看護論 3年次前期

(1) 担当教員 竹内朋子

(2) 教育内容

終末期にある対象の全人的苦痛を緩和するための看護、臨死期・死亡直前期・死後の看護、終末期患者家族へのグリーフケアについて理解することを目標とした。死すべき存在を対象とする医療職を目指す者として、自己と他者の経験や意見を学習資源にできるよう、事前

課題やグループディスカッションを活用した。次年度も、終末期看護の実践能力向上につながる講義を目指す。

8) 成人看護実践論 3年次前期

(1) 担当教員 松本和史、高田由紀子、原口昌宏、丹後キヌ子、佐藤琴美

(2) 教育内容

成人看護に必要な看護技術を理解し、個別性のある看護過程を展開できることを目標にした。看護技術に関しては、酸素療法、血糖測定、一次救命処置などの看護技術の演習を行った。さらに、シミュレーション演習を取り入れ、学生が臨床現場をイメージして主体的に学修できるよう工夫した。看護過程に関しては、教育用電子カルテでの看護事例を用いて、より実践的な理解を促した。

9) 成人看護の探求 3年次後期

(1) 担当教員 竹内朋子、新山真奈美、松本和史、高田由紀子、原口昌宏

(2) 教育内容

成人看護にまつわる今日的課題について認識し、看護師としての自己の見解を論述できることを目標とした。様々な課題についての最新の動向や研究知見にもとづいて講義し、自己と他者の経験や意見を学習資源にできるよう、グループディスカッションを活用した。次年度も、看護師として幅広い視野を持ち、論理的に他者と議論する力を養う講義を目指す。

10) 慢性期看護学実習 2年次後期

(1) 担当教員 松本和史、竹内朋子、新山真奈美、高田由紀子、原口昌宏、佐藤琴美、丹後キヌ子

(2) 教育内容

今年度開講された3単位の实習であり、患者の退院後の生活の再構築に向けセルフマネジメント能力を高めるための看護を学ぶことを目的に、4病院で行った。病棟実習では慢性疾患をもつ患者1名を受持ち、看護過程の展開を行った。また、外来看護実習や退院支援看護師からの講義等を取り入れ、病棟看護以外の看護師の役割も多角的に学べるよう工夫した。次年度は、介護施設での実習も加え生活者としての対象者の理解を深めていく。

11) 老年生活支援実習 (旧カリ) 2年次後期

(1) 担当教員 新山真奈美、丹後キヌ子、佐藤琴美

(2) 教育内容

介護保険施設で暮らす高齢者の生活と看護師の役割を理解することを目標とした。施設の役割と構造および施設における看護師の役割の理解、療法的アプローチを実施しながら高齢者の理解やコミュニケーション能力を高める実習を展開した。学生が主体的に利用者

と関わりながら実習目的が達成できるように、臨床指導者や職員と協同・連携し進めたことで、高齢者理解やコミュニケーション能力により影響となった。カリキュラム変更に伴い、本科目は今年度で閉講となる。

12)急性期看護学実習 3年次後期

(1)担当教員 高田由紀子、原口昌宏

(2)教育内容

外科系病棟1週間、手術室・救命救急センター1週間の計2週で構成した。教員と実習指導者は、協働して患者の全体像を踏まえた看護過程の展開と実践、評価を指導した。事後レポートでは、術後合併症予防に向けた観察、早期離床の促進のほか、治療選択の倫理的課題、看護師の役割などが理解できた実習となっていた。次年度も実習との連動性を高めた前期の演習や講義、課題と統合して急性期看護実践の習得を目指す。

13)慢性期看護学実習 3年次後期

(1)担当教員 松本和史

(2)教育内容

患者の退院後の生活の再構築に向けセルフマネジメント能力を高めるための看護を学ぶことを目的に、東京医療センターと東京病院で行った。臨地実習では慢性疾患をもつ患者1名を受持ち、看護過程の展開を行った。また、退院支援看護師との講義や事例検討を取り入れ、病棟看護以外の看護師の役割も多角的に学べるよう工夫した。カリキュラム変更に伴い、今後は2年次後期の3単位の科目となる。

14)終末期看護学実習 3年次後期

(1)担当教員 竹内朋子、佐藤琴美

(2)教育内容

入院中の終末期患者を1名ずつ受け持ち、終末期の全人的苦痛を緩和するための看護、臨死期・死亡直前期・死後の看護、終末期患者家族へのグリーフケアを看護過程にそって実践した。次年度も、終末期にある患者と家族への緩和ケアを実践する能力を養成していきたい。

15)老年看護学実習 3年次後期

(1)担当教員 新山真奈美、丹後キヌ子

(2)教育内容

【小児看護学領域】

1. 教育方針

健康・不健康を問わず、子どもとその家族・取り巻く社会を理解し、発達段階に応じた

専門的知識に基づく技術の実践できる能力を養うことを目的とし小児看護学概論・小児看護実践論・小児看護学実習の3科目の構成。

2. 科目名

1) 小児看護学概論：2年次後期

(1) 担当教員 中島美津子、玄順烈、永井史織

(2) 教育内容

小児各期の成長・発達理論、小児医療の歴史の変遷、倫理、理念および身体機能を学び、現代の小児看護の役割と課題の明確化を目的とし講義はすべて対面講義。毎回グループワークを実施。子どもを取り巻く社会的情勢を盛り込んだ外部講師からのリアルな現場の話や時事問題に関するテーマでのディスカッションであり、アンケートでもグループでの学びの共有や生の講義が好評であった。次年度も社会変化に則した講義展開としたい。

2) 小児看護実践論：3年次前期

(1) 担当教員 中島美津子、玄順烈、永井史織

(2) 教育内容

子どもの病状や経過、子ども特有の症状に応じた看護実践に必要な基礎的知識を学び、子どもの健康障害の回復や成長発達の促進に向け、子どもとその家族の援助方法を理解することを目的とした。講義は対面中心、急性期から終末期までの経過別、障害のある子どもとその家族の看護などの事例、及び事例に想定される技術演習を実施。遠隔実演での技術評価とした。次年度も実習に繋がられるような新事例とその技術演習としたい。

3) 小児看護学実習：3年次後期

(1) 担当教員 玄順烈、中島美津子、永井史織

(2) 教育内容

小児看護実践に必要な基礎的能力の理解と実践を目的とした。実習施設は東京医療センター5B病棟、成育医療研究センター、世田谷区立保育園43園を使用。1週間病棟1週間保育園での実習とした。保育園と入院中の子どもの比較からの学びや指導者と教員や多職種とのカンファレンスから子どもが示す反応の意味、子どもの力を発揮させる援助の工夫、家族との情報共有方法、非言語的コミュニケーションなどの実際を学べていた。

【母性看護学・助産学領域】

1. 教育方針

女性のライフサイクル（乳幼児期・思春期・成熟期・更年期・老年期）およびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助理論と方法について学ぶ。

2. 科目名

1) 母性看護学概論 2年次後期

(1) 担当教員 朝澤恭子、小嶋奈都子、鬼澤宏美

(2) 教育内容

内容は母性の概念、セクシュアリティ、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、母性看護の歴史と母子保健統計、女性のライフサイクル各期の健康問題と看護であった。講義の他に周産期の倫理的課題に対する事例検討を実施し、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等のアクティブラーニングを用いた。次年度も講義内容と教材を精選し、ICT活用とアクティブラーニングの実施に取り組む。

2) 母性看護実践論 3年次前期

(1) 担当教員 朝澤恭子、小嶋奈都子、鬼澤宏美

(2) 教育内容

内容は主に妊娠期・分娩期・産褥期のある女性と新生児に対する看護である。授業は、講義と演習により構成した。事例検討、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等のアクティブラーニングを用いた。母性看護技術演習では演習時間に個別指導を行い、確認テストを実施し、コメントをフィードバックした。次年度も講義内容と教材を精選し、ICT活用とアクティブラーニングの実施に取り組む。

3) 母性看護学実習 3年次後期

(1) 担当教員 朝澤恭子、小嶋奈都子、鬼澤宏美、大野悠子

(2) 教育内容

東京医療センターおよび成育医療研究センターにおいて臨地実習を90時間実施した。学生は産後入院中の母子1組を受け持ち、看護過程を展開するとともに、母子の健康状態の観察、褥婦への癒しケア、新生児の沐浴またはドライテクニック等の看護を実践した。一部の学生は妊婦の健康診査の実践および分娩期のケアも行った。次年度は沐浴や分娩見学等がより多く実施できるよう調整する。

4) 疾病と治療Ⅳ 2年次前期

(1) 担当教員 朝澤恭子、金子あけみ、門間哲雄

(2) 教育内容

内容は内分泌疾患、女性生殖器疾患、泌尿器疾患における病態生理と治療、看護であった。解剖学・病態生理学等の知識を想起させ、関連づけて体系的に学ぶように計画した。講義では病態生理の図解、反復強調、動画や静止画の視聴、ミニテスト、国家試験問題の解説を工夫した。乳房モデルを用いた自己検診体験などのアクティブラーニングも取り入れた。次年度も知識の定着を促す工夫をし、ICTとアクティブラーニングを取り入れる。

【精神看護学領域】

1. 教育方針

精神・身体・知的を含む三障害の概念や特性の理解を目的とし、歴史的背景や基礎的知識、看護援助の習得に関するカリキュラムを実施している。障害者を取り巻く現状や課題に、主体的な言動ができる態度を身につけてほしいと願っている。

2. 科目名

1) 看護倫理 1年次後期

(1) 担当教員 田中留伊、朝澤恭子、玄順烈、中村裕美

(2) 教育内容

本科目は看護実践における倫理の重要性や倫理的課題の解決方法を理解し、人権擁護の視点から、看護師としての責務を果たせる専門職の育成を目的としている。医学的知識や実習経験が少ない1年次後期科目のため、授業では身近な事例や問題を提示し、倫理的問題に対する関心を高められるよう工夫を行った。また、授業終了後は小レポート提出を求め、一方向の授業にならないように心がけた。次年度も引き続き上記の取り組みを行っていきたい。

2) 臨床コミュニケーション論 2年次前期

(1) 担当教員 田中留伊、中村裕美

(2) 教育内容

自己のコミュニケーションについて洞察及び啓発を目的とした科目である。日常場面のコミュニケーション技術について、陥りがちな課題に焦点を当てながら、段階的に実際の臨床場面での効果的なコミュニケーションを考察できる構成とし、主体的に参加できるよう体験型授業展開を行った。次年度以降も、専門的で相手の立場に立った自分らしいコミュニケーションを常に模索していけるような授業展開を心がけていきたい。

3) 精神看護学概論 2年次後期

(1) 担当教員 田中留伊、中村裕美、久保田彩

(2) 教育内容

初学者であるため、理解しやすい用語や内容で精神看護について関心が持てるよう心がけた。こころの働きや精神的健康、障害の概念や歴史的背景が理解できるよう工夫し作成した教材を用い、精神障害者の健康増進・ノーマライゼーションを推進するために必要な基礎的知識を習得できるよう展開した。授業内で発言できる機会や授業終了後の小レポート提出など学生が主体的に取り組める配慮を行った。次年度も引き続き上記の取り組みを行っていきたい。

4) 精神看護実践論 3年次前期

(1) 担当教員 中村裕美、田中留伊、久保田彩

(2) 教育内容

精神障害を持つ対象の理解が深まるように、主な精神疾患や症状についてオリジナルの教材を用いて授業を展開した。また、精神障害をもつ対象の支援に必要な看護技術が考えられるよう個別で事例展開をし、全体で発表会を行うことでアクティブラーニングを取り入れ学習を深めた。さらに、授業後の小レポートの内容を踏まえ次回の授業では学生の理解しにくい点を補足できるような工夫を行った。次年度以降も上記取り組みを継続していきたい。

5) 障害者看護論 3年次後期

(1) 担当教員 中村裕美、田中留伊、久保田彩

(2) 教育内容

精神・身体・知的の三障害を持つ対象を理解できるように、オリジナルの教材にて授業を展開した。重症心身障害、神経難病の具体的な看護実践や支援方法については、臨床で看護を実践している講師を招き、生きた看護を学べるよう工夫した。また、今年度からの取り組みとして、自己の障害者観を深めることを目的としたグループワーク及び発表会を実施し、個々の障害者観を考える機会とした。次年度以降も上記取り組みを継続していきたい。

6) 精神看護学実習 3年次後期

(1) 担当教員 田中留伊、中村裕美、菅原裕美、久保田彩

(2) 教育内容

本実習では、精神障害者を包括的に理解するとともに、自立および自己実現に向けた援助を通し、必要な看護が実践できる基礎的能力を育成することを目指した。臨地実習では、学生は1人の受け持ち患者を通して看護過程の展開を行った。また、電気けいれん療法や多職種カンファレンス等を見学したことで、精神医療の実際及び保健医療福祉チームの現状や課題について考えることができた。今後も、実習指導者との連携を密に行い効果的な指導を検討していきたい。

【地域看護学】

1. 教育方針

地域看護学領域では、地域で暮らす様々な健康段階にある人々が主体性をもち生活するために必要な支援について、理論や技術および諸制度を通して学ぶことを目的とする。科目は、地域看護学と在宅看護学で構成される。

2. 科目名

1) 地域看護学概論 1年次前期

(1) 担当教員 明石眞言

(2) 教育内容

人々の生活の質の向上とそれを支える健康で安全な地域社会の構築、健康と安全を支援することにより生活の継続性を保障し、生活の質の向上に寄与、多様な場で生活する様々な健康レベルにある人々を対象とし、その生活を継続的・包括的にとらえることを学ぶ。次年度は、社会の動きと学生の考えを積極的に取り入れた内容としたい。

2) 自立支援教育論 1年次後期

(1) 担当教員 駒田真由子、森山潤、長菜摘

(2) 教育内容

健康教育の方法、健康行動に関する理論を提示し、健康課題を抱えた対象に対して、自立支援へとつなげる具体的な手法を講義で提供した。地域住民を対象として設定し、健康教育の企画、作成、実施について学生が取り組み、グループで対象者や媒体を選んで、地域住民に実施することを想定した演習を行った。次年度は、媒体作成時に、いっそう学生が主体的に取り組めるように支援していきたい。

3) 疾病予防看護学 2年次前期

(1) 担当教員 駒田真由子、赤石春佳

(2) 教育内容

プライマリヘルスケアやヘルスプロモーションの基本的考え方、**Social determinants of health** と健康増進施策、健康格差について、最新の法改正や世界における課題についても含めて講義を構成した。行動経済学、ナッジ理論についても講義し、健康行動の変容に活かす必要性や方法について考え、学んでもらうことに努めた。説明方法の工夫により、学生の理解度が高くなっていると感じたため、次年度は、さらに理解度が高められるように展開したい。

4) 在宅看護学概論 3年次前期

(1) 担当教員 大越扶貴、森山潤

(2) 教育内容

在宅看護が要請される社会的背景や法制度の変遷および教育の動向を踏まえ、在宅看護過程に用いる ICF 理論や家族システム理論等についてペーパー事例を通して実践的に学ぶことを目的とした。また家族介護者理解を深めるために、介護離職、ヤングケアラーなどの時事的問題を取り上げ、看護職としての介護者支援のあり方を提示した。次年度は、リアクションペーパーによる授業に対する質問・意見の把握とフィードバックに

努め、課題等の改善を図りたい。

5) 在宅看護実践論Ⅰ 3年次後期

(1)担当教員 駒田真由子、森山潤、長菜摘

(2)教育内容

在宅看護におけるコミュニケーション、医療ケア、災害対策、疾患別の看護など事例やDVDを用い、既習の知識の統合と応用が図れるよう工夫した。また講義内でもアセスメント技術の向上を意識したほか、発展的な内容として外部講師による講義で、訪問看護ステーション開設・運営の基礎等についての理解を促した。次年度は、今年度同様、映像や事例演習を実施し、多様な視点を学ぶ機会を提供したい。

6) 在宅看護実践論Ⅱ 4年次前期

(1)担当教員 駒田真由子、赤石春佳、森山潤

(2)教育内容

実習に向けての準備として、介護保険におけるケアマネジメントおよびペーパー事例を通して在宅看護過程の展開技術を身につけるための演習を行った。実習直前の復習と確認の意味もある講義であったため、多くの学生が集中力を保っていた。次年度も、引き続き演習の順序性と内容の見直しを図りたい。

7) 在宅看護学実習 4年次前期

(1)担当教員 明石眞言、駒田真由子、赤石春佳、森山潤

(2)教育内容

今年度はコロナ後の臨地実習を少しずつ元の軌道に戻せた運びとなった。療養者・家族が自立した生活を営むために必要な保健・医療・福祉の連携の実際を学び、地域包括ケアシステムの中の看護の役割を考察することを促した。ここ数年のコロナの影響で実習に制限があったこともあり、在宅看護学実習で臨地に行けたことに関しては大きな学びになった様子であった。次年度も学生が自らの意見を積極的に発言できるよう支援していきたい。

6-2. 大学院看護学研究科

【高度実践看護コース】

1. 教育方針

クリティカル領域における診療看護師（NP）の役割を理解し、専門性の高い、高度な実践力をもって役割を遂行できる能力を習得した診療看護師を育成することを目標としている。チーム医療の一員として患者の状況・病態を的確に把握し、自ら考え、判断し、安全性を確保した上で、必要な診療行為・ケアが確実に提供でき知識・技術・態度を習得する。今年度は、演習、実習の一部を、本コースの修了生（診療看護師：NP）で、臨床現場で活躍している診療看護師（NP）が分担し、年2回開催した臨床教授会にも、一昨年度から臨床実習指導者として参加した。

2. 科目名

1) クリティカルNP特論 1年次前期

(1) 担当教員 山西文子、浦中桂一、忠雅之、武田純三、鈴木美穂、関口奈津子

(2) 教育内容

NPを導入している先進国、とくに米国におけるNPの現状等を把握するために、米国で実践活動をしているNPやNPと活動した経験をもつ医師等の講義を受け日本における診療看護師の現状および課題等について理解を深めた。統合実習の前後にて特定行為に関する手順書を作成し、医師も含めたスーパーバイズを受けた。診療看護師（NP）を取り巻く行政や各学会の動向について適時、学生に情報提供および指導内容に含めていく必要がある。

2) 人体構造機能論・演習 1年次通年

(1) 担当教員 忠雅之、石志紘、白石淳一、今西宣晶、川岸久太郎、関口奈津子

(2) 教育内容

クリティカル領域における病態生理、疾病の理解の基礎となる人体の機能や構造に関する基礎知識を習得するため、クリティカルな状況にある患者の生体侵襲について理解しながら、生命維持に直結する呼吸器系・循環器系・中枢神経系および代謝機能に係る代表的な臓器や疾病の病態生理等の基礎的な知識を習得することができた。講義については、学生一人一人が各臓器や疾病の病態生理を担当し、特定の行為に関連する解剖生理をプレゼンテーションをおこなった。発表後は各診療科の専門医の講師から指導を受ける形式とした。さらに学修した内容を深めるため解剖見学と解剖見学演習を通して人体の構造を肉眼的に観察し理解を深め、知識を習得することができた。2年次の統合実習に向けて良い動機付けとなった。

3) クリティカル疾病特論 1年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、牛窪真理、小林佳郎、上野博則、池上幸憲、須河恭敬、吉川保、安富大祐、谷本耕司郎、樅山幸彦、門松賢、川口義樹、福原誠一郎、山根章、小山田吉孝、林拓郎、尾藤誠司、栗原智宏、鈴木亮、古野毅彦、忠雅之、関口奈津子

(2) 教育内容

クリティカル領域において頻度の高い疾患について、医学的根拠に基づく判断能力と問題解決能力を修得するために、各疾病の病因、病態生理等の基礎的な知識を学んだ。具体的な授業展開は、グループ毎に課題症例を設定し、文献的な検討を行いながら、講師から指導を受け、プレゼンテーションを行い、発表後に講師から指導をうける形式で行った。さらに学生の学修効果を高めるためには、事前学修、事後学修の徹底を図る必要がある。

4) 診察、診断学特論（包括的健康アセスメント） 1年次前期

(1) 担当教員 小野孝二、山西文子、尾藤誠司、上野博則、樺山幸彦、栗原智宏、白石淳一、北沢敏男、長谷川栄寿、奥田茂男、武山茂、福原誠一郎

(2) 教育内容

患者の病態に対応した症状アセスメント、診察ができるための知識を習得することを目的にした科目である。診察、生理学的諸検査で得られた所見等を用いて、診断が確定できる能力を修得することができた。個々の患者に対応した的確な診察の方法、診断のために必要な臨床検査の選択、検査結果の解釈、撮影から読影迄のプロセスと医師による読影法などを学び、診断のプロセス等を実際のデータ等を使用して理解を深めることができた。

5) フィジカルアセスメント学演習 1年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、忠雅之、関口奈津子、小山田吉孝、池上幸憲、安富大祐、鄭東孝、森岡秀夫

(2) 教育内容

患者の健康問題を解決する上で必要とされ、身体的・包括な機能評価のためフィジカルイグザミネーションについて、学生がインストラクターとなってグループ学習を展開した。アクティブラーニングを対面およびオンライン授業にて展開したが、今後は後半の医師の講義に先立ち前半のまとめにて臨床推論の要素をより多く取り入れて疾患を思考する身体診察する時間を設ける必要がある。

6) 臨床推論 1年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、尾藤誠司、鄭東孝、山下博、鈴木亮、南修司郎、安富大祐、太田慧、栗原智宏、辻崇、古野毅彦、吉田哲也、野田徹、三春晶嗣、門間哲雄、吉田心慈、忠雅之、関口奈津子

(2) 教育内容

クリティカル領域で遭遇する症状や状態に応じた臨床推論ができるよう、その過程を学び、それを裏付けるためのフィジカルアセスメント・検査を行い、症状に応じた的確な判断・臨床推論ができるための知識・技術を習得する。臨床推論の実際について、事例を用いて医師の思考過程についても理解を深める。最も多い時間をかけて学修するように臨床教授の医師も積極的に協力してもらい、実習時に繋がるような指導をしてもらっている。

7) 診断のためのNP実践演習 1年次後期

(1) 担当教員 浦中桂一、山西文子、忠雅之、奥田茂男、鈴木亮、太田慧、鄭東孝、尾藤誠司、安富大祐、池上幸憲、栗原智宏、辻崇、早川隆宣、高以良仁、森泉元、関口奈津子

(2) 教育内容

クリティカル領域において対応する可能性の高い患者のフィジカルアセスメントができ、必要とされる臨床検査の選択を安全かつ確実に実践するための知識、技術の修得を目的とする。特定行為 2 行為について実技試験を実施し履修生の技術習得度を評価した。今後は授業内容と関連させて評価方法を洗練していく必要がある。患者の実際の画像を用いて画像診断の進め方、トリアージの概念、機能、方法を学ぶ学生たちが診療行為(特に省令に定められた特定行為)毎の手順書を作成し、臨床実習の際の資料として活用し統合実習の際の指導医師の理解も深まりつつある。

8) 臨床薬理学特論 1年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、廣田孝司、青山隆夫、大島信治、池上幸憲、吉川保、福原誠一郎、須河恭敬、岩田敏、忠雅之

(2) 教育内容

本科目はクリティカル領域で使用頻度の高い薬物療法について確認し、各種薬物と生体との反応機序、薬物の効果に個人差が生じる要因等について理解し、安全な治療を進めるために必要な知識を身に付けることを目標とする。外部講師による講義で薬事法を含む薬物の安全管理と処方について理解を深め、更に、臨床現場の専門医から指導頂いた。学生には苦手意識が見られるが、動機づけはされたので、今後は各学生の個人学修に拠る。

9) 治療のためのNP特論 1年次後期

(1) 担当教員 浦中桂一、忠雅之、安村里絵、吉川保、川口義樹、小山孝彦、林拓郎、大迫茂登彦、石志紘、横山明弘、尾藤誠司、山下博、関口奈津子

(2) 教育内容

クリティカル領域の患者に対する治療法およびその適応について科学的根拠に基づいて理解する科目である。治療の生体へのメリット、デメリットを理解し、治療の立案、変更、終了などの判断が的確に実行できるための知識を修得することができた。消化器系手術、呼吸器系手術、脳の手術、心・大血管系の手術を取り上げ、手技に関する基本的事項、輸血、感染予防などを専門医から直接指導を受けることができた。

10) 治療のためのNP実践演習 1年次後期

(1) 担当教員 浦中桂一、山西文子、忠雅之、関口奈津子、内藤亜由美、池上幸憲、小井土雄一、佐々木毅、岩田敏、太田慧、木下貴之、宮田知恵子、須河恭敬、小山田吉孝、吉川保、栗原智宏、川口義樹、落合博子、小山孝彦、若林和彦、鄭東孝、安富大祐、鈴木亮、森岡秀夫、正岡博幸、門松賢、中村真樹、高以良仁、青木美絵、森泉元

(2) 教育内容

選択した治療法の科学的な根拠を理解し、患者への説明と、患者の同意のプロセス、選択した治療を的確に実行できるための技術を修得する。また、治療の際の診療看護師としての役割と限界を認識することの重要性を学んだ。今後も救急・重症患者の管理方法、集中治療の管理方法、がん化学療法とペインコントロールの方法、人工呼吸器・気管挿管・抜管・縫合・圧迫止血・経腸栄養・中心静脈ライン確保・褥瘡の治療方法などの処置等について、適用する目的、手順を、演習を通して学べるよう学習環境を整えていく。また特定行為6行為について実技試験)を実施し履修生の技術習得度を評価した。今後は授業内容と関連させて評価方法を洗練していく必要がある。

11) 統合演習 2年次前期

(1) 担当教員 浦中桂一、山西文子、忠雅之、関口奈津子、鈴木亮、太田慧、林智史、吉田心慈、石渡智子、熊沢貴史、山森有夏、TA数名

(2) 教育内容

救急外来、内科外来、一般病棟における診療看護師(NP)としての役割や臨床推論を活用した患者の病態や必要な検査・治療について考えることができることをねらいとした。これまでの看護経験と1年間学修してきた医学知識を統合し、外傷事例、心窩部痛事例、呼吸器疾患事例を用い、リーダーシップ、メンバーシップをとりながらチームパフォーマンスが最大限に機能できる基本的能力を養う内容とした。

12) 統合実習 2年次通年

(1) 担当教員 山西文子、浦中桂一、忠雅之、関口奈津子、東京医療センター・災害医療センター・東京病院の臨床教授、JNP実習指導者他

(2) 教育内容

2年次7月から12月中旬までで17週間、国立病院機構東京医療センター、災害医療センター、東京病院の3施設において、救命救急科、総合内科、外科、麻酔科の各診療科をローテーションし、計17週の実習を行った。実習では、実習指導医の指導のもとで、患者を

受け持ち、患者の診察・診断、治療の一連のプロセスを経験した。1年次に講義、演習を通して学んだ知識と技術を統合し、チーム医療の一員としての診療看護師の役割を意識しながら、実習に取り組んだ。学生が作成した38の特定行為の手順書を施設に提示し、省令に定められている38の特定行為の実践経験を積み重ねるなど、積極的に取り組んだ。臨床指導医からの実習の評価も高く、全員が無事実習を修了することができた。統合実習の開始前、および終了後に本学およびオンライン形式において、計4回の臨床教授会を開催し、本学の教員も参加し、意見交換を行った。

13) コンサルテーション・インフォームドコンセント特論 1年次後期

(1) 担当教員 忠雅之、高井良仁、関口奈津子、尾藤誠司、木下貴之、岩田敏、宮田知恵子

(2) 教育内容

医療におけるコンサルテーションとインフォームドコンセントのもつ意味を理解し、診察で得られた初見や画像診断やデータ分析に基づく診断内容について、患者の状況に対応して説明できる知識と実践方法を学修することができた。外来診療から小児、急性期、終末期と様々な医療のフィールドの視点からのインフォームドコンセントの現状と課題の講義を受講した。さらにはクリティカル領域における、患者の状況に応じたインフォームドコンセントの実際の医療場面の説明方法と内容の課題を受け、ロールプレイを通して、説明の内容の根拠から患者が納得するプロセスをたどれるよう具体的な実践方法を習得することができた。2年次の統合実習に向けて実践につなげる良い動機付けとなった。

14) NPによるチーム医療特論 1年次前期

(1) 担当教員 忠雅之、関口奈津子、林哲郎、中村香代、川村和也、島田珠美

(2) 教育内容

チーム医療におけるスキルミックス、タスクシフトイング、タスクシェアリングについて理解を深めるため、チーム医療のキーパーソンとしてチーム医療のガイドライン等を活かし、社会から求められているチーム医療の在り方を学修した。医師をはじめ専門看護師、クリティカル、プライマリ・ケア、周術期の高度実践看護師や管理者におけるチーム医療の在り方を学修することで、様々な視点からチーム医療の必要性や目指す方向性、キーパーソンとしての役割を理解を深め考えることをねらいとした。さらにチーム医療の取り組みについて、GWを通して日本の医療機関の現状分析をおこない、外部環境と内部環境の視点から問題を取り上げ、チーム医療のガイドライン作成につなげる内容の発表をおこなった。その結果から今後の新しいチーム医療の在り方について自己の考えを明確にすることができた。

15) 医療安全特論 1年次後期

(1) 担当教員 山西文子、忠雅之、木下貴之、岩田敏、松浦友一、渋谷直子

(2) 教育内容

医療事故等は、日常的に起こる可能性があることを認識し、事故の発生を防止し、患者の安全が最優先事項であることを理解することができた。医療事故を防止するためには、医師の指示を批判的に思考する力、危険を回避するために医療行為の優先度を決定する力、患者に不利益な状況が生じている場合に対象に情報提供できる力、対象が受ける治療や処置に伴う有効性や危険性を患者が分かるように説明できる力などを習得することが必要であることを学んだ。GWを通して日本で実際にあった特定行為に係る事例を取り上げ、既存の理論を使用して分析し、主要な原因や関連する要因、解決までのプロセスについて検討し、その結果を発表し、全体で討議行う形式で進め、事故の発生を防止するためのさまざまな方策を修得することができた。

16) 政策医療特論 1年次前期

(1) 担当教員 山西文子、松本純夫、女屋光基、石原傳幸、當間重人、笠原群生、島田和弘

(2) 教育内容

政策医療とは何か。国が医療計画を立てて、我が国の国民にどのような医療提供体制を準備しているか。国民の為に意図的に行われている医療の特徴、治療技術の最前線で戦っている医療関係者の話を通して、現在の医療の各種特徴が見えて、そのような医療提供の場においても医療者の一員として力が発揮できるように期待している。今回は成育医療センター笠原病院長、国立がん研究センター島田病院長に最前線の取り組みを伺った。

17) 感染症マネジメント 1年次後期

(1) 担当教員 山西文子、大曲貴夫、岩田敏、関口奈津子

(2) 教育内容

感染症に関して、原因となる病原体についての特徴、ヒトに感染したときの症状の現れ方や特殊な状態などあらゆる側面について講義で知識の確認をし、ここ数年流行しているコビット-19の流行の特徴。感染防止対策の方法、治療の実際等興味深い知見が得られた。我が国における法的な対応策等の実態も得ることが可能であった。後半はグループになりそれぞれの課題を更に深めて発表会を実施。得るものは多く有意義な単位であった。

18) 研究特論 1年次前期

(1) 担当教員 大島久二、小野孝二、田中留伊、竹内朋子、朝澤恭子、浦中桂一、小宇田智子、高橋聡明

(2) 教育内容

研究実施する上で、必要な倫理的側面、研究方法・デザインについてより得意としている教員から実際のデータ収集、分析法、論述法、発表方法等について学んだ。倫理的な配慮や準実験研究、動物実験研究、調査研究、質研究など多くのことを学んだ。

19) 課題研究 1年次、2年次通年

(1) 担当教員 山西文子、浦中桂一、忠雅之、関口奈津子、その他（教授・准教授・講師・助教）

(2) 教育内容

一人ひとりの院生が、個別の研究課題を設定し、関連情報の収集、研究計画の立案、研究実施、研究成果の発表に至る、研究全般にわたるプロセスを担当教員の助言・指導を受けながら実施した。論文の執筆と学会を模した形式の発表会においては抄録やスライドの準備を行い、成果を論文としてまとめる力、プレゼンテーション能力を習得できた。

学生氏名	指導教員	研究課題
KG022001	竹内教授	看護師の特定行為研修の受講意向ならびにその関連要因
KG022002	松本准教授	特定行為研修修了者の職業的アイデンティティの特徴と自尊感情および職務満足感との関連
KG022003	小野教授	救急集中治療室における協働型の看護提供方式が Patient Safety Events に及ぼす影響
KG022004	高橋准教授	クリティカル領域に関わる診療看護師（NP）と医師の協働的実践の実態－Collaborative Practice Scales 日本語版を用いて－

KG022005	竹内教授	看護師からみた病棟薬剤師による薬剤業務の実態および病棟特性をふまえた薬剤業務のニーズ
KG022006	玄准教授	看護職の日勤看護業務プロセスにおける業務中断の実態－Business Process Management ツールを用いた他計式 time and motion study－
KG022007	小宇田准教授	高脂肪食摂取におけるオートファジーの抑制に対する絶食の影響
KG022008	田中教授	High flow therapy における酸素化指標の挿管リスク予測精度に関する後方視的観察研究
KG022009	中島教授	訪問看護における同行訪問の実態調査
KG022010	松本准教授	訪問看護ステーションおよび介護福祉施設における特定行為研修修了者の継続教育の現状と課題
KG022011	浦中准教授	二次救急外来の上部消化管出血に対する緊急内視鏡検査実施の関連要因
KG022012	松山教授	静脈穿刺前の上腕標準法・アームダウン法・アームスイング法が肘静脈の怒張に及ぼす影響-超音波装置を用いた血管断面積の比較-
KG022013	朝澤准教授	診療看護師のキャリア開発のプロセス
KG022014	松山教授	アイスパックを用いた頸部冷却による起立時の血圧への影響
KG022015	新山准教授	C 病院における日中及び夜間に搬送された重篤患者への早期医療介入の有効性の検証
KG022016	田中教授	診療看護師（NP）の倫理的感受性及び倫理的行動力の特徴
KG022017	朝澤准教授	中堅男性看護師におけるキャリア・プラトーの要因および改善の展望
KG022018	小宇田准教授	閉経後の高脂肪食摂食マウスに対する <i>Glycine max</i> co-cultured with <i>Basidiomycota</i> 摂取による肝臓の脂質代謝への影響
KG022019	浦中准教授	病院に所属する診療看護師（NP）と特定行為研修修了者の外科系業務内容についての実態調査
KG022020	玄准教授	医療機関における同行訪問の実態と課題

KG022021	忠講師	診療看護師（NP）と医師における外来診療時間の検証 ～発熱のある患者の医療面接・身体診察に着目して～
KG022022	中島教授	特別支援学校における看護業務の実態～関東圏内の調査結果から～
KG022023	高橋准教授	下肢挙上および弾性ストッキング着用が深部静脈の血流速度・血管径に及ぼす影響
KG022024	新山准教授	高次機能障がい者の家族介護者が抱く心理的特性に関する文献検討
KG022025	小野教授	プレホスピタルにおける患者徴候と救命救急センター入室の関連性の後方視的研究
KG020012	竹内教授	診療看護師（NP）の職務満足に関する海外文献レビュー

【高度実践助産コース】（助産師免許プログラム・助産師プログラム）

1. 教育方針

専門性の高い実践力を備え、女性とその家族の生涯にわたる健康を支援できる自律した助産師の育成を目的としている。特に周産期医療における病院内外の助産システムに対応できる専門性の高い助産師の育成を目指す。

2. 科目名

1) 助産学概論 1年次前期

(1) 担当教員 島田三恵子

(2) 教育内容

助産の基本概念と歴史的変遷から概説し、女性を取り巻く社会背景を認識し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性、さらに助産師活動に取り組む姿勢と魅力、それらを支えるために必要な看護政策を含め系統的に教授した。次年度も女性を取り巻く課題、母子保健の課題、医療政策・看護政策について講義とディスカッションを織り交ぜながら助産師のアイデンティティを獲得する動機づけとなるよう講義を工夫した。

1) 生殖機能学（正常・異常） 1年次前期

(1) 担当教員 佐藤いずみ、山下博、大野暁子、真壁健、大木慎也、家谷佳那

(2) 教育内容

女性生殖器の解剖・生理、女性のライフサイクルを通じた性と生殖の健康問題、疾患及び異常に関する基礎的な知識の理解を深める講義を行った。また、助産師国家試験にて出題が増加している妊娠期の異常と婦人科疾患について頻出問題に関する講義内容を強化した。

2) 助産薬理学特論 1年次前期

(1) 担当教員 佐藤いずみ、三浦寄子、中島研、伊藤直樹

(2) 教育内容

薬理学の総論と基礎、妊産褥婦を対象とした和漢薬物の効用、副作用、併用禁忌、拮抗作用、投与方法、服用方法等について情報検索エンジンも含めて解説し、妊婦や授乳婦における催奇形性、胎児毒性、授乳中の安全性について薬物使用上の管理および留意点について理解を深め、各自が活用できるように講義をおこなった。近年の増加している無痛分娩については麻酔薬等に関する基礎知識を教授した。

3) 助産栄養学特論 1年次通年

(1) 担当教員 佐藤いずみ、北島幸枝

(2) 教育内容

健康な女性の心と身体作りのための食事のあり方や出産適齢期の食生活の現状と課題を通して、健康な女性の身体作りに必要な栄養管理の知識を習得できるように講義をした。さらに、日本人の食事摂取基準を基本に、栄養アセスメントと栄養管理方法、人工栄養の特性と問題点、補完食の進め方について教授した。調理実習では減塩食の工夫、補完食の調理、調乳を行った。

4) 家族社会学特論 1年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、松島紀子

(2) 教育内容

家族社会学についての基礎的な概念や内容を学び、現代の家族問題への理解と社会的対応について整理し、共働き家族、高齢者介護、児童虐待、ドメスティックバイオレンスなどの現代の家族問題について理解を深めた。さらに、リプロダクティブヘルス・ライツに影響を及ぼすジェンダー格差が健康にもたらす影響について学び、家族社会学の視点から人々をエンパワーメントする方策について講義を行った。

5) 助産フィジカルアセスメント学演習 1年次通年

(1) 担当教員 佐藤いずみ、島田三恵子、服部純尚、松井哲、忠雅之、田舎中真由美、勝山なおみ

(2) 教育内容

妊娠・出産・産褥期を通して変化する女性の身体を理解する為に、フィジカルイグザミネーションの技術を用いて周産期の女性の全身の包括的アセスメント、正常異常の判断の実際について演習を通して教授した。また、理学療法士の専門家による骨盤ケア技術の演習や、乳がんの基礎知識、診察技術についての講義・演習を行った。

6) 助産臨床推論 2年次前期

(1) 担当教員 佐藤いずみ、梅原永能

(2) 教育内容

助産における臨床推論の意義を理解した上で自立的な判断スキルを持つ助産師の育成を目的に、講義演習を行った。臨床推論の意義、臨床推論における思考のプロセス、臨床推論事例の展開（妊娠期から産褥期）を繰り返し行い臨床推論を用いた考え方のトレーニングを行った。さらに、産科救急出血を想定した具体的事例に対しチームとして臨床推論を行い、思考の過程を明確にしながらかケア提供まで自立して行う演習を行った。

7) 妊娠期診断・技術学 1年次通年

(1) 担当教員 佐藤いずみ、和田誠司、島田三恵子、小嶋奈都子

(2) 教育内容

妊娠期における女性の心身の生理的变化と妊娠期に起こりやすい異常、胎児の成長発達に関する基本的知識から胎児診断と胎児治療に関する知識まで幅広く知識を習得できるように講義および演習を行った。

8) 分娩期診断・技術学 1年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、服部純尚

(2) 教育内容

分娩期における女性と胎児の生理的プロセスと生理的状态からの逸脱を診断する知識と分娩介助法と助産ケアの技術を習得する目的で、講義・演習を実施した。更に、産痛緩和法など女性に寄り添う助産実践力の向上に力を注ぎ、分娩期における助産師の判断能力と技を考察できるよう工夫した。高度実践助産を目標に、異常産婦の管理とケアを取り入れ、近年増加するハイリスク産婦の管理の知識獲得ができるよう、講義演習を展開した。

9) 産褥期診断・技術学 1年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、小澤千恵、小林浩一、浅井百合絵

(2) 教育内容

産褥期女性の身体的・心理的・社会的変化に応じた助産診断とケアを行うための基本的な知識と技術についての講義、演習を行った。近年、乳児虐待の予防対策が求められている事から、産後うつの基本的知識と周産期や地域での対応について講義を強化した。母乳育児支援として、乳房管理の理論と乳房ケアの基本技術の演習を行った。次年度は具体的な産褥期の女性のケアをできるよう講義演習を充実させる。

10) 新生児期診断・技術学 1年次通年

(1) 担当教員 小嶋奈都子、加部一彦、柳田亜紀子、菅島加奈子

(2) 教育内容

新生児の生理、発育、生理機能・運動機能・精神機能の発達について知識を習得するための講義を行った。加えて、実習での経験を踏まえ新生児に起こりやすい異常に関して各自で学習し、プレゼンテーションを行った。また、ハイリスクな分娩や児にも対応できるようにハイリスク新生児や倫理的配慮も含めたNICUの看護も学ぶ機会を提供した。次年度も、実践に役立つ学習になるよう、胎児期からの予測を踏まえた新生児ケアの理解を促す。

11) 助産診断・技術学演習 1年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、佐藤いずみ、馬場一憲、浅井百合絵、勝山なおみ、永森久美子、朝倉花、川津幸恵、

(2) 教育内容

妊娠期～産褥期・新生児期の助産診断と助産過程の基本と展開、妊娠期の保健指導・支援、正常分娩介助法の原理と演習、胎児心拍陣痛図による胎児診断、助産師のための超音波検査、助産実践演習 OSCE、産後の骨盤調整、産後の生活支援と保健指導について学んだ。更に、近年需要が増している産後ケアについての理解を深めるため、世田谷区産後ケアセンターに入所中の母子ケアの実際と運営を見学した。

12) 実践助産学特論 1～2年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、大原玲子、小松久人、臼井いづみ、坂本和代、浅井百合絵

(2) 教育内容

医学・助産モデルの両方の視点から助産診断・助産ケアを可能にするため、Teams STEPS、超音波検査法の基本、産科麻酔の実際、産科救急への対応、妊産婦の一時救命処置のためのBLS、新生児の救急蘇生NCPR(Aコース)の講習など、発展的・応用的な知識と技術を学習した。

13) 実践助産学演習 1～2年次通年

- (1) 担当教員 小嶋奈都子、小澤克典、藤田恵理子、田舎中真由美、浅井百合絵、
下地富子、酒井涼、猪野幸峰

(2) 教育内容

医師や助産師、鍼灸師等の各分野の専門家を講師とし、妊産褥婦のケアの充実に向けた実践的かつ、発展・応用的な内容の授業を行った。理論及び技術に関する講義に加えて、演習を多く取り入れることにより、実践力の強化に向けた学びが得られていた。次年度も、学習環境の整備及び調整を行い、学生が興味・関心を持って積極的に学習ができるように工夫していく。

14) ウィメンズヘルス特論 1年次前期

- (1) 担当教員 朝澤恭子、片岡弥恵子、小嶋奈都子

(2) 教育内容

セクシュアリティ、リプロダクティブ・ヘルス、女性のライフサイクルに沿った健康問題に対する助産ケアに必要な基礎的能力を養い、女性の健康を支援するための研究・実践への理解を深め、ウィメンズヘルスにおける助産ケアを追究することを目標に展開した。思春期、成熟期、更年期にみられる健康問題、受胎調節の实地指導に必要な原理・知識・技術に関して、講義に加えてプレゼンテーションとディスカッションにて学習を進めた。

15) ウィメンズヘルス演習 1年～2年次通年

- (1) 担当教員 佐藤いずみ、島田三恵子、浅井百合絵、勝山なおみ

(2) 教育内容

思春期、成熟期、更年期、老年期、周産期のいずれか特定のライフステージにおいてヘルスケアニーズをもつ女性への健康教育が実施できる事を目的に、健康教育の概論を講義にて教授した。1年次では都内の小中学校にて性教育の実際を学び学んだ内容についてディスカッションを行った。2年次は、健康教育の実際に関する基礎知識を教授した後、妊孕可能年齢にある女子大生を対象にプレコンセプションケアに関する健康教育を行った。

16) 不妊症・遺伝看護学特論 1年次前期

- (1) 担当教員 朝澤恭子、小澤伸晃

(2) 教育内容

遺伝看護の対象となる家族性腫瘍、先天異常、神経難病等の患者および生殖医療の対象者と家族に対するアセスメントやケアを理解することを前提に展開した。主な遺伝性疾患の遺伝形式、クライアントが抱える課題と必要なケア、遺伝的な課題を持つ人々へのアセスメントの視点、不妊症の検査および治療、クライアントが抱える課題とケアに関して講義を進めた。不妊治療を受ける人々へのアセスメントの視点を理解できるよう展開した。

17) 助産管理学特論 1年次通年

- (1) 担当教員 島田三恵子、柴田仁夫、川岸真由美、野町寧都、市島美保、平井晶子、鈴木幸子、宮下美代子

(2) 教育内容

周産期における具体的な事故・判例から周産期のリスク管理を考察した。組織管理の基本概念とマネジメントの基本的考え方をドラッカー理論から学び、施設助産管理への応用を試みる講義をした。マーケティング理論、医療経済、関連法規及び周産期医療システム、目標管理、総合病院での助産師外来と院内助産システムの実際について、講義及びディスカッション形式で進めた。助産院での講義も行い、助産所の運営の実際と経営を学んだ。

18) 地域助産活動論 1年次後期

(1) 担当教員 島田三恵子、土屋清志、岡本登美子、宮下美代子、氷見知子、藤田恵理子

(2) 教育内容

助産師の開業権を生かし母子および家族のニーズに沿った地域医療・地域助産活動について講義を展開した。満足度の高い「いいお産」の実現のために、助産所で取り組まれているフリースタイル分娩の実践力を身につけるために実践し、多岐にわたる助産師の活動について体験的に学ぶ機会を設定した。助産師の開業権を活かした地域での母乳開業助産師を講師に招き（オケタニ式乳房管理法）の講義・演習を組み入れた。

19) 地域母子保健学特論 1年次後期

(1) 担当教員 島田三恵子、福島富士子、大越扶貴、野尻由香、永森久美子

(2) 教育内容

地域母子保健の現状と課題、母子保健に関わる地域診断、地域母子保健の活動の実際や産後ケアセンターの活動について講義を行った。加えて、学生が考える日本社会における母子保健の今日的課題について、現状とこれを解決するために必要だと思われる方策、地域での助産師や保健師助産師が地域で果たすべき役割について、討論し学習を深めた。

20) 地域母子保健学演習 1年次後期

(1) 担当教員 島田三恵子、駒田真由子、野尻由香、浅井百合絵、勝山なおみ、デッケルト博子

(2) 教育内容

地域母子保健が抱える今日的課題についてグループワークを通して考え、地区診断により地域特性の理解、助産師・保健師として具体的な母子保健事業を考察することができた。妊産婦や乳幼児に対するアセスメントを通して、家庭訪問や保健指導、健康相談における支援の技術も身に付けることができた。

21) 災害助産活動論 1年～2年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、高村ゆ希、赤井智子

(2) 教育内容

自然災害、人為的災害、混合型災害と、近年、増加する災害に対する定義、管理、根拠立法、防災体制など基礎的知識を学習し、災害時の母子に特有の課題、被災地での母子支援について学習した。具体的な助産師の活動および支援策についてディスカッションすることで、各自が平時からの備えを自分ごととして主体的に学習をすることができた。

22) 国際助産学特論 1年～2年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、渡辺洋子、佐山理絵、谷口初美、井村真澄

(2) 教育内容

世界の助産実践と助産教育、母子保健における助産師の役割と実践活動、世界の産育習俗を社会・文化的背景から考察しながら、海外における国際助産活動の実際を学んだ。更に、学生が考える国内外における国際的な母子保健の今日的課題について、現状と必要と考える方策、助産師として果たすべき役割について、レポートにまとめて学習を深めた。

23) 助産学基礎実習 1年次前期

(1) 担当教員 島田三恵子、佐藤いずみ、浅井百合絵、勝山なおみ

(2) 教育内容

国立病院機構東京医療センターおよび国立病院機構埼玉病院で各4週間、国立成育医療研究センター及び国立病院機構相模原病院で各2週間、4施設で実習を行った。正常な妊娠・分娩・産褥・新生児期の経過をたどる対象の助産診断、分娩介助の実施、助産過程の展開を目標とした。4週間で1～3例/学生1名の分娩介助が実施できた。

24) 助産実践力開発実習 1年次後期

(1) 担当教員 島田三恵子、佐藤いずみ、浅井百合絵、勝山なおみ

(2) 教育内容

国立成育医療研究センターで4+1週間、国立病院機構埼玉病院4週間、国立病院機構東京医療センター及び国立病院機構相模原病院で各2週間、4施設で実習を行った。分娩介助を中心として、正常経過中の妊娠・分娩・産褥・新生児期を対象に助産過程の展開と実践能力の修得をこの実習目標とした。4~5週間で4~7例/学生1名の分娩介助を実施できた。分娩直後の新生児の計測・NCPRの実践、知識と実践能力の強化が課題である。

25) 助産実践力発展実習 2年次前期

(1) 担当教員 佐藤いずみ、島田三恵子、浅井百合絵、勝山なおみ

(2) 教育内容

ハイリスク妊婦とハイリスク児を対象とした実習を、国立病院機構東京医療センターの産科病棟・産婦人科外来2週間、国立成育医療研究センターのNICU3日間、MFICU2日間で実習を行った。ハイリスク妊産婦および児について助産診断能力を強化し、ケアを実践することができた。次年度も同様により効果的な実習を調整する。

26) 地域助産学実習 1年次後期・2年次前期

(1) 担当教員 佐藤いずみ、島田三恵子、浅井百合絵、勝山なおみ

(2) 教育内容

稲田助産院、さくらバース、とわ助産院、みやした助産院、森重助産院、矢島助産院の6施設の助産院で実習をした。保健所実習は、品川区、台東区の各保健センターで実施した。地域助産学実習のねらいとして、助産師の役割、母子に関わる姿勢の根源や高度実践助産ケアについて、6週間という実習期間をかけ、これまでの実習を振り返りながら考察し、実践し知識と技術を習得した。次年度も同様により効果的な実習を調整する。

27) 医療倫理特論 1年次後期

(1) 担当教員 大越扶貴、早川正祐

(2) 教育内容

各コースの看護職が、実践を行う中で引き起こされる倫理的意思決定の場面(事例)を取り上げ、臨床倫理の4分割法等理論を援用しながら検討・考察を行った。また、倫理的課題のある共通事例を用い、各コースをミックスしたグループで多職種および家族等も含め、本人にとって最善の方針について合意する方法を討議し発表を行った。

次年度は、グループで扱う共通事例の工夫を図りながら、各コースの専門的視点を活かした討議ができるようにしたい。

28) ラボラトリー・メソッド特論 1年次前期

(1) 担当教員 小宇田智子、大島久二、明石眞言、小野孝二

(2) 教育内容

ヒトの健康像を理解するうえで必要な医学・生物学の知識を得るための手法を指導した。臨床現場で使われている手法や最新の科学研究で使われている手法を用いて、個体・組織・遺伝子および分子レベルでの生命現象について理解できるような授業の工夫をした。来年度も、最新の科学研究で使用される手法について、その原理や利用方法などを概説し、生命現象について科学的に正しく理解できるように工夫する。

29) 看護教育学特論 1年次後期

(1) 担当教員 松山友子、浦中桂一、忠雅之

(2) 教育内容

今年度は、看護職養成に関わる教育制度の理解に加え、高度実践看護職として教育的役割を果たすために必要な教育原理・方法の基礎知識について、院生によるプレゼンテーションを行った。授業設計の実際では、各自が選択した授業テーマについて指導計画・指導案を作成し、模擬授業を展開するとともに他者・自己評価を踏まえた今後の課題をレポートにまとめた。次年度は、指導案作成過程における各自の課題の検討を充実させたい。

30) 保健統計学 1年次後期

(1) 担当教員 浦中桂一

(2) 教育内容

研究論文の講読や分析の実施において必要な統計学の基本的な性質や考え方を理解し、統計ソフトを用いたデータ分析の統計手法を学ぶことを主な目標とした。わかりやすい授業を心がけ既存の演習データを用いて、単変量解析および回帰分析について統計ソフトの実践演習を行った。今後は、論文等を例示するなどより実践的な学修計画を図っていく必要がある。

31) 研究特論 1年次前期

(1) 担当教員 大島久二、小野孝二、田中留伊、竹内朋子、朝澤恭子、浦中桂一、小宇田智子、高橋聡明

(2) 教育内容

看護研究における初歩的な研究テーマの設定法、データ収集法、解析法、倫理上の配慮などについて具体例を示しながら解説した。本来の研究はどのようなものであるかを教授し、また、研究成果を学会あるいは学術誌に発表するためのプレゼンテーションおよび論文作成に関する基本的な手法について習得できた。

32) EBPM 探究論 1年次前期

(1) 担当教員 朝澤恭子、小嶋奈都子

(2) 教育内容

周産期女性の問題・疑問を定式化し、最適な文献を検索し、PICOを用いて批判的吟味を行った。助産領域のRCT論文を用いてPICO、ランダム割り付け、ベースラインの同等確認、Outcomeへの反映、ITT解析、脱落率、マスキング、結果の評価といった手順でクリティクを行い、エビデンスに基づいた結果の理解と批判的吟味を修得した。次年度も研究の学修に活かせるよう、助産領域のRCT論文を用いて実施する。

33) 高度実践助産学研究 1～2年次通年

(1) 担当教員 島田三恵子、朝澤恭子、佐藤いずみ、小嶋奈都子

(2) 教育内容

一人ひとりの院生が、個別の研究課題を設定し、関連情報の収集、研究計画の立案、研究実施、研究成果の発表に至る、研究全般にわたるプロセスを担当教員の助言・指導を受けながら実施した。論文の執筆と学会を模した形式の発表会においては抄録やスライドの準備を行い、成果を論文としてまとめる力、プレゼンテーション能力を習得できた。

【研究】

1. 課題研究

高度実践助産学研究：高度実践助産コース（助産師免許取得コース）

学生	指導教員	研究課題
----	------	------

KG122001	佐藤准教授	妊娠期の父親らしさによる産後の父親発達への影響
KG122002	佐藤准教授	直接授乳移行へのケアニーズと地域の支援を受けるまでのプロセス
KG122003	佐藤准教授	産後1か月の母親の家族機能と首尾一貫感覚(Sense Of Coherence)との関連
KG122004	朝澤准教授	母親の出産満足度と児への愛着に関する分娩様式による相違
KG122005	朝澤准教授 小嶋講師	助産学生のコミュニケーションスキルと共感経験および学習経験の関連
KG122006	朝澤准教授	看護系大学生における幼少期の環境が青年期のコミュニケーションおよび自尊感情に与える影響

【高度実践公衆衛生看護コース】

1. 教育方針

本コースでは、理論や実践等を通して、複雑多様化している健康課題や健康危機に対応できる能力を養う。また地域特性を的確に把握し、ヘルスリテラシーやソーシャル・キャピタル等を高められる保健師育成を目指す。

2. 科目名

1) 公衆衛生看護学概論 1年次前期

(1) 担当教員 大越扶貴、駒田真由子

(2) 教育内容

公衆衛生看護学の基本的な考え方および地域における看護活動の場と必要性について理解するとともに、保健師という職種に対する理解と関心を醸成しそのあり方を探求することを目的とした。講義は、公衆衛生看護の活動理念や歴史的背景を踏まえ、その活動が職業倫理を前提に法律や政策、理論等に基づいている内容とした。

次年度は、公衆衛生看護活動のあり方が探求できるよう先駆的活動事例を含めるなど工夫を
図りたい。

2) コミュニティアセスメント論 1年次前期

(1) 担当教員 駒田真由子、赤石春佳

(2) 教育内容

地域診断に用いる理論の理解と現状の課題把握をするとともに、コミュニティアズバートナーモデルを用い、地域診断の基本および方法を学ぶことを目的とした。保健師活動に必要とされる地域住民の健康や生活状況等、潜在・顕在的なニーズを把握するための情報収集、アセスメント・分析、課題の明確化と課題解決方法などを中心に講義および一部演習を行った。

次年度は今年度同様、本科目とコミュニティアセスメント演習の科目間の連携を充実させる。

3) 公衆衛生看護活動論 1年次前期

(1) 担当教員 大越扶貴、駒田真由子

(2) 教育内容

地域で生活する個人・家族・集団などの様々な対象者への支援方法（相談面接、家庭訪問等）について援用できる理論を用い、演習を通して理解を深めることを目的とした。今年度は新生児訪問事例を扱い、初回訪問や継続訪問のロールプレイを行い、振り返りを実施した。本科目はカリキュラム改正により新設された。次年度は実際の保健師活動を視野に入れ、児童虐待等ハイリスク母子事例についての相談・訪問の展開演習を含めていきたい。

4) 地域成人・高齢者保健論 1年次前期

(1) 担当教員 増田理恵

(2) 教育内容

地域で生活する成人、高齢者の個人・家族・集団への支援について、施策の変遷を通してその必要性を学び、事例等を用いながら支援の実際について学ぶことを目的とした。地域包括支援センターの保健師をゲストに迎え講義を通して支援の方法や技術についてより具体的に学んだ。本科目はカリキュラム改正により新設された。次年度は法改正の意義や理解も含め今年度の実習における当該科目内容過不足を検証しながら講義内容の改善を図りたい。

5) 地域精神保健論 1年次前期

(1) 担当教員 大越扶貴

(2) 教育内容

地域における精神障害のある人々への支援方法（相談面接、家庭訪問、ピア活動等）について援用できる理論を用い、演習を通して事例理解を深めることを目的とした。ペーパー事例は相談面接から初回訪問までをロールプレイを通して学んだ。また現行の施策の動向を踏まえながら地域定着および包括的マネジメントについて理解を深めた。本科目はカリキュラム改正により新設された。次年度は今年度同様演習を中心に科目の充実を図りたい。

6) 地域保健学特論 1年次前期

(1) 明石眞言

(2) カリキュラム改正に伴い選択科目となった。履修希望者はいなかった。

7) 公衆衛生危機管理論 1年次前期

(1) 担当教員 明石眞言

(2) 教育内容

自然災害や新興・再興感染症対策に関する法制度や動向について理解し、保健師としての役割、支援方法を学んでもらうことを目的に講義を行った。災害時、新興感染症の流行時、虐待等をテーマとして、健康危機管理のシステムや対象者への支援方法を取り扱った。次年度も保健師を取り巻く状況の変化を考慮しつつ、学ぶ範囲を広げていきたい。

8) 住まいづくり論 1年次前期

(1) 担当教員 大越扶貴

(2) 教育内容

WHO や健康日本 21（第二次）において着目されている環境に焦点を当てた健康増進・疾病予防のための住環境の視点や方策を得ることを目的とした。スマートシティの実際や家庭訪問のDVD視聴および見取り図を用いた住環境のアセスメントを通して、健康と住まいについて、ミクロ・マクロ的観点について理解を深めた。次年度は健康と住まいとの関連について、より最新の知見を踏まえた講義としていきたい。

9) 健康教育方法論 1年次前期

(1) 担当教員 増田理恵

(2) 教育内容

健康行動に関する理論について歴史的な理論の改変や、新しい理論に至るまで、対象者の自己効力感を効果的かつ持続的に高めるための各種教育スキルを提供した。

次年度は、実際の健康教育の事例を交えて、より現場的視点を涵養できるように工夫していきたい。

10) 疾病予防看護学特論・自立支援教育特論 I 1年次 通年

(1) 担当教員 明石眞言

(2) 教育内容

海外の原著研究論文を自ら辞書をひき触れることで、研究論文の構造、内容の理解を深めることを目的とし、研究論文の紹介と内容の議論を行う授業である。学生が自分の能力に合わせて読み、プレゼン資料を作成、内容の理解に努めつつ論文紹介を行ってもらった。研究の構造やデザイン、分析など総合的に研究力を学ぶ機会となった。次年度以降も学生の能力に合わせて到達レベルを考慮しながら継続的に実施していく。

11) 自立支援教育特論演習 I 1年次前期

(1) 担当教員 駒田真由子、大越扶貴、赤石春佳

(2) 教育内容

住民のヘルスリテラシーを高め、地域のソーシャル・キャピタルを高めるためのアプローチについて実践的に理解を深めることを目的とした。区内社会福祉協議会の協力を得、住民の支えあい活動の場への継続的参加を通して健康に対する意識などを把握し介入方法について検討し、実際の住民への健康教育を通して一部実践した。

次年度は、社会福祉協議会との連携を継続するなかで他職種の理解を深めつつ、健康に関わる住民へのアプローチについて実践的理解を推進する。

12) 公衆衛生関連法規 1年次後期

(1) 担当教員 金子あけみ

(2) 教育内容

日本国憲法を始めとして、公衆衛生看護の分野に関連した法律や法制度について、歴史的な経緯及び社会状況等を踏まえながら、保健師として地域づくりを推進するために必要な法制度に関する知識を深めた。授業は一定の枠組みに基づき、プレゼンテーションとディスカッションによるアクティブラーニングとし、最終的に保健医療福祉の法制度全体を俯瞰できるよう図表の作成を試みた。次年度もアクティブラーニングの実施に取り組む。

13) 行政論 1年次後期

(1) 担当教員 金子あけみ、非常勤講師

(2) 教育内容

公衆衛生看護を实践する基盤である行政の仕組みについて、地方自治制度や財政制度について学習し、将来の公衆衛生看護に係る政策形成へ参与できる能力を養うことを目的としている。ニューパブリックマネジメント等の政策立案の理論動向や行政計画論、住民参加と公務員の役割についても概説し、実際に政策の作り方を演習として実施した。次年度も住民に寄り添える保健師の能力開発を目指し、アクティブラーニングを実施していく。

14) 産業保健学 1年次後期

(1) 担当教員 明石眞言

(2) 教育内容

産業の場で就労している対象の状況を理解し、健康増進のための活動や起こりうる健康

障害を予見し対応できる産業保健活動の基礎知識と技術を習得することを目的に講義を行った。労働基準法に労働安全衛生法に関しては重点的に行った。現在、講義中心となっているため、次年度は演習も取り入れた授業展開を行っていきたい。

15) 学校保健学 1年次後期

(1) 担当教員 明石眞言

(2) 教育内容

就学している対象（児童・生徒・学生）の状況を理解し、健康増進のための活動や起こりうる健康障害を予見し対応できる学校保健活動の基礎知識と技術を習得することを目的に講義を行った。特に文部科学省、厚生労働省や内閣府から公表されるデータの閲覧を重視した。次年度は学生の理解度がより高まるように、学校保健の最新のデータ見方を視野に入れる。

16) 医療保健疫学 1年時後期

(1) 担当教員 駒田真由子

(2) 教育内容

集団における疾病や健康現象を評価するために必要な疫学の基礎を学び、公衆衛生看護の実践や公衆衛生看護研究において疫学の考え方、手法を活用する方法について理解してもらう目的で講義を行った。学生は研究のデザインやバイアス、交互作用の考え方を具体的事例とともに学ぶ機会となった。引き続き、学生が疫学的思考を身につけられるような授業展開をしていきたい。

17) 医療保健疫学演習 1年次後期

(1) 担当教員 駒田真由子

(2) 教育内容

医療保健疫学で学んだ疫学の知識を応用し、研究デザインや交絡因子の調整方法について専門の教科書の輪読を通して理解を深めた。公衆衛生看護研究の実践に活用できる能力を養う目的で行った。この時期、学生は統計や疫学などの講義を受けて研究デザイン、分析方法の理解が深まってきているため、次年度も学生の理解度や能力に合わせて、講義・解説をしつつ学生の資料作成、発表、質疑応答が活発に行えることを目指して行いたい。

18) 国際保健学 1年次後期

(1) 担当教員 駒田真由子、森山潤

(2) 教育内容

国際保健政策についての理解を促し、国際機関の状況・国際保健の担い手に関する講義をしたうえで、実際の国際保健活動について臨場感のある講義を提供することを目指した。次年度も、引き続きSDGsについて学び保健師の視点からの国際保健という点を考慮しつつ、国際保健分野の状況の変化に対応した講義を展開していく。

19) コミュニティアセスメント演習 1年次後期

(1) 担当教員 駒田真由子、長菜摘

(2) 教育内容

コミュニティアセスメント論で学んだ知識、技術を応用して地域診断を実践する。様々な手法で入手したデータを基に、地域住民の健康にかかわる問題・課題とその要因を分析し、地域の生活や健康課題を解決するための活動計画とその評価、施策化の視点を演習を通して学ぶことを目的に行った。実際に調べたことを公衆衛生看護学実習Ⅰに活かすため、次年度も課題の指導を丁寧に行い、発表形式を工夫して実施したい。

20) 公衆衛生看護学実習Ⅰ 1年次後期

(1) 担当教員 駒田真由子、大越扶貴、長菜摘

(2) 教育内容

実習地域の健康課題を把握し、参加事業と連動させるなど保健センター等で取り組まれている事業(施策化も含む)や実践活動との関連について考察することを目的とした。また、個人・家族・集団の支援を通して保健師として要請される技術を習得することを目指した。

実際の訪問ではペーパー事例だけでは得られない学生の深い学びが記録に如実に表れ、次年度も積極的に保健所の実習指導者と連携・調整していく必要性を感じた。

21) 公衆衛生看護学実習Ⅱ 1年次後期

(1) 担当教員 駒田真由子、明石眞言、森山潤

(2) 教育内容

職場における産業保健活動の実際と産業保健活動の仕組みや産業看護職の役割について実践的に学ぶ。労働者・家族の特性を理解し、健康課題の把握と援助の方法、必要な連携・協働・ネットワークづくり・職場巡視等について理解することを目的に実習を行った。次年度も限られた時間で産業保健の実際が学べるように工夫をしていきたい。

22) 疾病予防看護学特論・自立支援教育特論Ⅱ 2年次 通年

(1) 担当教員 明石眞言

(2) 教育内容

海外研究論文に触れることで、研究論文の構造、内容の理解を深めることを目的とし、研究論文の紹介と内容の議論を行う授業である。学生が自分の能力に合わせて和訳を行い、資料を作成、内容の理解に努めつつ論文紹介を行ってもらった。研究の構造やデザイン、分析など総合的に研究力を学ぶ機会となった。次年度以降も学生の能力に合わせて到達レベルを考慮しながら継続的に実施していく。

23) 自立支援教育特論演習Ⅱ 2年次前期

(1) 担当教員 駒田真由子

(2) 教育内容

ひがしが丘保健室便りの作成を通じて、保健事業のプランニング、コーディネーション、マネジメントの能力の一端を養うことを目的とした。コロナが5類感染症になるタイミングで、専門家へのインタビューに成功し、特集として別冊も作成した。社会福祉協議会の協力もあり、今までで最大の配布数となった。アンケートによるフィードバックもあり学生には大きな達成感が得られていた。次年度も科目で設定した目標が達成できるように演習を計画的に行っていきたい。

24) 地域包括ケア実習 2年次前期

担当教員 明石眞言、駒田真由子

(1) 教育内容

地域包括支援センターでの実習を通して、地域包括支援センターの役割とそこで働く保健師の役割を学び、地域特性に応じた地域包括ケアシステム構築のために必要な視点を考察した。次年度は、大学院としての地域包括支援センターでの実習である点を踏まえて、積極性を促し、困難事例のケアマネジメントのような発展的内容にも踏み込んで実習できるように工夫をしていきたい。

25) 地域診療所実習 2年前期

(1) 担当教員 駒田真由子

(2) 教育内容

診療所での実習を通して、地域で療養生活をしている住民の現状を認識し、そこから地域医療で果たすべき保健師の役割を考察する目的で行った。クリニック以外でも訪問診療などに同行し、地域医療に携わる看護職の仕事について理解ができていた。次年度以降も、引き続き地域包括ケアシステムの中の診療所の役割や、保健師と診療所との連携について、イメージできるような実習を提供していきたい。

26) 保健統計学 1年次後期

(1) 担当教員 浦中桂一

(2) 教育内容

研究論文の講読や分析の実施において必要な統計学の基本的な性質や考え方を理解し、統計ソフトを用いたデータ分析の統計手法を学ぶことを主な目標とした。わかりやすい授業を心がけ既存の演習データを用いて、単変量解析および回帰分析について統計ソフトの実践演習を行った。今後は、論文等を例示するなどより実践的な学修計画を図っていく必要がある。

27) 保健医療福祉システム特論 1年次後期

(1) 担当教員 金子あけみ、清水美智夫、非常勤講師

(2) 教育内容

保健医療福祉分野における法制度及び政策決定プロセスを学習するため、社会保障システムを主軸に様々な統計データを用いて解説した。これらの知識を踏まえ、学生個々の関心のある保健医療福祉領域の政策提案のプレゼンテーションを実施した。本年度から看護科学コース（看護管理）と一部合同で授業を行ったことにより、学生間の意見交換が活発化し、効果的な学習となった。次年度も学生の視野の拡大、思考の深化を目指したい。

28) 医療倫理特論 1年次前期

(1) 担当教員 大越扶貴、早川正祐

(2) 教育内容

各コースの看護職が、実践を行う中で引き起こされる倫理的意思決定の場面（事例）を取り上げ、臨床倫理の4分割法等理論を援用しながら検討・考察を行った。また、倫理的課題のある共通事例を用い、各コースをミックスしたグループで多職種および家族等も含め、本人にとって最善の方針について合意する方法を討議し発表・共有を行った。次年度は、グループで扱う共通事例の工夫を図りながら、各コースの専門的視点を活かした討議ができるようにしたい。

ヒトの健康像を理解するうえで必要な医学・生物学の知識を得るための手法を指導した。臨床現場で使われている手法や最新の科学研究で使われている手法を用いて、個体・組織・遺伝子および分子レベルでの生命現象について理解できるような授業の工夫をした。来年度も、最新の科学研究で使用される手法について、その原理や利用方法などを概説し、生命現象について科学的に正しく理解できるように工夫する。

29) ラボラトリー・メソッド特論 1年次前期

(1) 担当教員 小宇田智子、大島久二、明石眞言、小野孝二

(2) 教育内容

ヒトの健康像を理解するうえで必要な医学・生物学の知識を得るための手法を指導した。臨床現場で使われている手法や最新の科学研究で使われている手法を用いて、個体・組織・遺伝子および分子レベルでの生命現象について理解できるような授業の工夫をした。来年度も、最新の科学研究で使用される手法について、その原理や利用方法などを概説し、生命現象について科学的に正しく理解できるように工夫する。

33) 課題研究 1～2年次通年

学生	指導教員	研究課題
----	------	------

KG422001	駒田講師	タクシードライバーにおける運動習慣の有無に関する意識の相違：タクシー会社における調査から
KG422002	駒田講師	保育園児の保護者の HPV ワクチンに関する認識と子どもへのワクチン接種意思との関連
KG422003	明石教授	ソーシャル・キャピタルと喫煙行動の関連性—成人就業者を対象とした調査—

【看護科学コース（看護管理者プログラム）】

1. 教育方針

本プログラムは、本年度に開講した。看護管理上の課題に対してエビデンスに基づいて体系的に問題解決する能力、ならびにエビデンスを創出する研究能力を養成し、さらには病院経営や政策提言にも参画できる高度なマネジメント能力を持つ看護管理者の育成を目指している。

2. 科目名

1) 組織管理学：1年次前期

(1) 担当教員 竹内朋子、手島恵

(2) 教育内容

組織デザインと組織運営、組織における倫理に関する 2 部構成とし、いずれも講義をふまえたアクティブラーニングを実施した。第 1 部では理論にもとづいて組織分析し、組織開発・組織改革計画を立案する演習を取り入れた。第 2 部では、組織管理における看護管理者の役割をグローバルな観点からディスカッションした。次年度も、アクティブラーニングを活用して組織管理を体系的に学習する講義を目指したい。

2) 看護管理学特論（人材管理）：1年次前期

(1) 担当教員 竹内朋子、手島恵、山西文子

(2) 教育内容

看護管理者に必要な労使関連法規、人事システム、賃金体系等について発展的に学習し、人的資源を管理するうえで求められる看護管理者のコンピテンシー、リーダーシップ等について講義した。演習として、組織の人材管理について分析し、看護管理者としての役割と課題を抽出した。次年度も、履修生の看護管理者としての実績を活用して学習する講義を目指したい。

3) 看護管理学特論（資源管理） 1年次前期

(1) 担当教員 竹内朋子、大橋純江

(2) 教育内容

今日の看護管理者に必須の知識である医療経済・経営学を学習し、看護管理者として病院経営に参画する重要性を認識できるような講義を実施した。演習として、財務管理・マーケティング分析にもとづいて経営戦略を立案した。次年度も、看護管理者としての経営・財務管理能力を向上できるような講義を目指したい。

4) 看護管理学特論（質管理） 1年次前期

(1) 担当教員 山西文子、五十嵐裕子

(2) 教育内容

看護の質管理、組織の安全管理の 2 部構成とし、第 1 部では看護の質管理に関する現状

と課題について、第 2 部では医療安全に関する関連法規やガイドライン、災害医療体制を含む看護組織の安全管理に関して講義した。次年度も、看護管理者として組織の医療安全文化の醸成に貢献できるような講義を目指したい。

5) 特別研究 1-2 年次通年

(1) 担当教員 竹内朋子、福島富士子

(2) 教育内容

研究課題領域に関する文献検討やゼミナールを通して、研究課題を明確化し、具体的な研究計画を立案した。 Semesterごとに中間発表会を開催し、研究テーマに関するレビューや研究計画について発表し、ディスカッションを通してさらに研究内容を吟味した。次年度は、特別研究論文として研究成果をとりまとめられるように目指す。

【博士課程】

1. 教育方針

看護学のさらなる進化および看護の一層の質の向上に「貢献できる教育研究者」を養成することを目的とする。看護、看護学の発展のためには、EBN に基づいた研究活動、教育活動、実践活動が必要である。博士論文の制作を通して、教育研究者として、エビデンスを「つくり」「つたえ」「つかう」プロセスを理解し、それぞれのプロセスにおいて積極的に取り組み、看護界が抱える課題を的確に抽出し、解決していくことができる能力を醸成する。

2. 科目

1) 特別研究

学生	指導教員	研究課題
KD020001	大島研究科長	看護師の疲労代替指標の夜勤前後における変動並びに疲労度との関連